

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.215

2011年4月

平成22年度卒業式を挙げる



目次

●ニュース	
平成22年度卒業式を挙	3
城所駐モンゴル日本国特命全権大使による特別講演会を開催	12
国際産学官連携セミナーを開催	13
第3回名古屋大学基金感謝の集いを開催	14
平成22年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催	14
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	15
●知の先端	
ホタルの卵とミミズが光る話	16
大場 裕一（大学院生命農学研究科助教）	
●知の未来へ	
ヒトの情報処理過程についての研究	18
上村 純一（医学部保健学科助教）	
●学生の元気	
平成22年度名古屋大学総長顕彰 9名2団体表彰	19
平成22年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	21
●部局ニュース	
文学研究科公開シンポジウム「マンダラと論理のインド」を開催	24
複合材工学研究センターシンポジウム11を開催	24
国際開発研究科創立20年記念シンポジウムを開催	25
第3回「開発のためのアジア学術ネットワーク」国際セミナーを開催	25
国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説II」を開催	26
国際シンポジウム「日本研究における内外の視点」を開催	26
アジア開発銀行カンボジア行政官研修を実施	27
国際シンポジウム「グローバル化時代における現代東アジアの社会環境」を開催	27
外部評価委員会を開催	28
外部評価委員会を開催	28
高性能計算機システムφの運用開始式を挙	28
大学教育改革フォーラム in 東海2011を開催	29
第21回博物館企画展「草原の民モンゴリアン」を開催	29
博物館コンサートを開催	30
第4回地球教室「鉱物をさがそう！」を開催	30
●資 料	
平成23年度名古屋大学組織図	31
●受賞者一覧	32
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年2月16日～3月15日	34
●INFORMATION	
名古屋大学写真集『Nagoya University Impressions』及び	37
豊田講堂レーザークリスタルの置物を制作	
農学部が桜酵母と酒米による日本酒を製品化	37
●イベントカレンダー	38
●ちょっと名大史	
第6代総長 芦田 淳 <small>あしだ きよし</small> — 名大をひきいた人びと① —	40

平成22年度卒業式を挙





平成22年度名古屋大学卒業式が、3月25日(金)、豊田講堂において挙行されました。

午前10時から修士・専門職・博士学位授与式が、続いて午後11時50分から学士学位授与式が行われ、会場の豊田講堂は卒業生で満員となりました。

例年、名古屋大学交響楽団の演奏により始まっていましたが、今回は、3月11日(金)に発生した東日本大震災での深刻な被災状況を考慮し、演奏や合唱を取りやめる等、簡素化して執り行いました。

まず、学位記授与が行われる前に、この震災において犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、黙祷が捧げられました。

その後、来賓の方々が見守る中、

濱口総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,581名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生78名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生229名に博士学位記が、また、学部卒業生2,188名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、大学院環境学研究科博士課程前期課程修了生の三室碧人さんが修了生総代として、また、教育学部卒業生の白井栄理香さんが卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)より心のこもった祝辞をいただき、(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)式典は終了しました。

卒業式終了後には、本学が主体となり東日本大震災の募金活動が行われ、善意の義援金551,774円が集まりました。

卒業式の様子は、豊田講堂ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方が式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在の、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/publication/movie/>)で視聴することができます。



平成22年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、ご卒業おめでとうございます。今日は本来ならば、皆さんの卒業を、大学を挙げて祝うべき日ではありますが、まず始めに、申し上げるべき事があります。ご存じのように、3月11日、東北地方を中心に東日本大震災が起きました。この震災は、我が国にとって未曾有の国難であるといえます。被災され、現在も困難な状況にある方々に、心よりお見舞いを申し上げると共に、不幸にもお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げます。

この震災により、多くの日本人が、そして君たちと同世代の若者が、命を奪われました。今この瞬間も、被災地では君たちと同世代の若者が、家族を失い、家を失われ、厳しい生活の中で働いております。彼らが今、抱える悲しみと困難は、心より察するに余りあるものがあります。

今朝のニュースでは、すでに2万7千人を超える方々がお亡くなりになったり行方不明となっております。

実は、このような状況の中で、卒業式については議論がありました。果たして、卒業式を執り行うべきだろうか。

さて皆さんはどう思われますでしょうか。

実際、幾つかの大学では、卒業式を中止しております。しかし、名古屋大学においては、議論の結果、卒業式を行うこととしました。

何故だと思いませんか。

それは、今日の卒業式は、皆さんにとって、自立した社会人・市民として、社会貢献を求められる立場になる節目の意味を持つからです。

いま日本が直面している未曾有の困難にあたって、大学院を卒業する皆さんに、社会人・市民としてこの困難を直視し、悲しみに心を奪われるだけではなく科学者として冷静に現在の状況を分析し、一人ひとりの立場でできる事を考え、困難を乗り越える為の力を貸して頂きたい。これが、今日卒業を迎える皆さんに、我々教職員が心から願っていた事であります。

今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東北地方太平洋沖地震災害対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行ってまいりました。本日この会場にも、募金箱を用意してあります。どうか今日の皆さんの心を、被災に苦しむ人々に届けてあげていただけるようお願い申し上げます。

さて、私は、毎日ニュースを見るたびに、本当に深く心が痛みます。きっと皆さんも同じ思いであると思います。ご存じのように、津波に襲われた福島県の原子力発電所が多くの問題を発生しつつあります。直接的な問題として、原子力の暴走を我々が抑える事ができるのか。環境破壊と健康被害を最小限に抑える事ができるのか。いま問われて



おります。更に、今後長く続く問題として、電力不足が予測されます。関東地方では、すでに計画停電が実施されつつありますが、この問題は一朝一夕に解決できるものではありません。今年の夏は、最大1500万kwの電力不足が関東地方で予想されています。しかし、ご存じのように日本は、東と西で電気のサイクルが50ヘルツと60ヘルツの違いがあり、東日本で電力が不足しても、西日本の発電所が補完できる電力は最大で100万kwで、最大電力不足の15分の1しかありません。従って、現在の東日本の電力不足は長期化し、日本の産業、経済に大きな影響を与え、今後は日本の産業構造が大きく変わるであろう事が予測されます。

だからこそ、大きな被害のなかった中部地区、たまたま被害を免れた皆さんには、日本の経済を今までも増して支え、活性化していくことが求められています。大切なことは、悲しみに浸る事だけではありません。震災を免れることのできた者として、私達は、これからの社会の復興に責任を持っています。東日本大震災のもたらした結果を、科学者として冷静に見つめ、明日の日本へとつなげていく活動が必要であります。

さて改めて、卒業についてお話し致します。

名古屋大学は、本日ここに、平成22年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,581名に修士学位記を、大学院法学研究科専門職学位課程修了者78名に専門職学位記を、医学博士課程及び博士課程後期課程修了者229名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

皆さんは、これから社会に出られる方、研究者となる方、博士課程後期課程へ進学される方、とそれぞれ異なる道を歩まれます。しかし共通することは、今日新しい門出に立たれることです。皆さんに、心から拍手とエールをお送りします。

今日改めて卒業式を迎えているいろんなことを思い出しておられると思います。研究生活は充実していたでしょうか。どんなことが、心に残っているでしょうか。

皆さんがこれから旅立つ社会は、残念ながら決してバラ色ではございません。リーマンショック以来、世界全体で非常に不安定な状況が続いております。今年になり、経済はやや回復状況にありましたが、依然厳しく不安定な状況にあることは変わりません。また、中東で急速に政治体制の変化が起き、世界各地で自然災害が続いています。何故このような激しい変化が起きているのでしょうか。私は今、この原因が人口爆発、グローバル化そしてIT革命の潮流の中で、人類社会が大きく変わる戸口に私たちが立っているからであると実感しております。振り返れば、20世紀の科学は多くの利便性と快適性、長寿と物質的幸福を人類社会にもたらしました。しかし一方で、科学の発展は、人口爆発とそれに伴う資源枯渇、食糧危機、環境破壊等の深刻な危機を生み出し、従来の科学では解決困難な多様な課題に、我々は直面しています。21世紀の今日、人類社会は大きな転機に差し掛かっていると言えます。果たして私たちは、人類社会が持続可能となる解決法は見いだせるのでしょうか。

私の好きな、第35代米国大統領ジョンF. ケネディーはこんな言葉を残しています。

「私たちが抱える問題は、人間が作り出したものだ。したがって、人間が解決できる。人間の理知と精神は、解決不能と思われることもしばしば解決してきた。今またそうできると私は信じている」と。今回の大震災も同じ問題だと思えます。

人類社会が持続可能となる解決法を我々が見いだせるとするならば、それは科学の発展の中しかないと思えます。いま我々は、sustainability 持続可能性を実現する為の、新しい発想と価値観を持った科学技術を生み出す必要があ

るのです。人類社会は、この困難に果敢に挑む若い力を必要としています。そしてそれを可能とするヒントは、世界のあらゆる現場、いろんな立場の中にあると思います。我々の抱えている困難をまっすぐに見据え、挑戦し続ける人材となっていきたい、これが私のお願いでございます。

それから、東日本大震災について、もう少しお話ししたい事がございます。今回の大震災が起こったあと、私は海外の提携校や友人から多数のメールを受け取っています。彼らがメールの中で、異口同音に述べている事は、日本人には静かな強さがある。お互いを思いやる心がある。それを震災のビデオを見ながら感じておられます。そして彼らは、「きっと日本は復興できるでしょう」と述べています。私は、改めて日本文化の持つ粘り強さ、素晴らしさを海外の友人から逆に教えられたような気がしております。

それから今、震災に苦しみ、必死に活動されている方々、津波から住民を救おうと活動し、不幸にして命を失われた若い方々がいっぱい見えますが、その方々が、私達に語りかけている事があります。それは、かけがえのない存在として、家族、友人を大切にしなければならない事です。それから、毎日毎日を真剣に、誠実に生きる事です。皆さんがこれから生きていく人生は決して平坦ではありません。しかし、これから諸君が、どのような現場で働くとも、どのような立場になろうとも、またどんな事であろうとも、お互いを思いやり、誠実、真剣に生きていってください。そして、我々の抱えている困難を乗り越えて進んでいく道であると思えます。これは、今回の大震災が私たちに残した大切な教訓であると思えます。

沢山の願いをしましたが、本日は、卒業おめでとうでございます。皆さんの更なる成長を心から願っております。



平成22年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、ご卒業おめでとうございます。今日は本来ならば、皆さんの卒業を、大学を挙げて祝うべき日ではありますが、まず始めに、申し上げるべき事があります。ご存じのように、3月11日、東北地方を中心に東日本大震災が起きました。この震災は、我が国にとって未曾有の国難であるといえます。被災され、現在も困難な状況にある方々に、心よりお見舞いを申し上げると共に、不幸にもお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げます。

この震災により、多くの日本人が、そして君たちと同世代の若者が、命を奪われました。今この瞬間も、被災地では君たちと同世代の若者が、家族を失い、家を失われ、厳しい生活の中で働いております。彼らが今、抱える悲しみと困難は、心より察するに余りあるものがあります。

今朝のニュースでは、すでに2万7千人を超える方々がお亡くなりになったり行方不明となっております。

実は、このような状況の中で、卒業式については議論がありました。果たして、卒業式を執り行うべきだろうか。

さて皆さんはどう思われますでしょうか？

実際、幾つかの大学では、卒業式を中止しております。しかし、名古屋大学においては、議論の結果、卒業式を行うこととしました。

何故だと思いませんか。

それは、今日の卒業式は、皆さんにとって、自立した社会人・市民として、社会貢献を求められる立場になる節目の意味を持つからです。

勿論皆さんの中には大学院に進学される方もいますが、社会人としての自覚と立場を求められる点では同じだと思います。

いま日本が直面している未曾有の困難にあたって、大学を卒業する皆さんに、社会人としてこの困難を直視し、一人ひとりの立場でできる事を考え、困難を乗り越える為の力を貸して頂きたい。これが、今日卒業を迎える皆さんに、我々教職員が心からお願いしたい事です。

今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東北地方太平洋沖地震災害対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行ってまいりました。本日この会場にも、募金箱を用意してあります。どうか今日の皆さんの心を、被災に苦しむ人々に届けてあげていただけるようお願い申し上げます。

さて、私は、毎日ニュースを見るたびに、本当に深く心が痛みます。きっと皆さんも同じ思いであると思います。ご存じのように、津波に襲われた福島県の原子力発電所が多くの問題を発生しつつあります。直接的な問題として、原子力の暴走を我々が抑える事ができるのか。環境破壊と



健康被害を最小限に抑える事ができるのか。いま問われております。更に、今後長く続く問題として、電力不足が予測されます。関東地方では、すでに計画停電が実施されつつありますが、この問題は一朝一夕に解決できるものではありません。今年の夏は、最大1500万kwの電力不足が関東地方で予想されています。しかし、ご存じのように日本は、東と西で電気のサイクルが50ヘルツと60ヘルツの違いがあり、東日本で電力が不足しても、西日本の発電所が補完できる電力は最大で100万kwで、最大電力不足の15分の1しかありません。従って、現在の東日本の電力不足は長期化し、日本の産業、経済に大きな影響を与え、今後は日本の産業構造が大きく変わらざるを得ない事が予測されます。

だからこそ、大きな被害のなかった中部地区、たまたま被害を免れた皆さんには、日本の経済を今までも増して支え、活性化していくことが求められています。大切なことは、悲しみに浸る事だけではありません。震災を免れることのできた者として、私達は、これからの社会の復興に責任を持っています。東日本大震災のもたらした結果を、科学者として冷静に見つめ、明日の日本へとつなげていく活動が必要であります。

さて改めて、卒業についてお話しします。

名古屋大学は、本日ここに、平成22年度の学部卒業生2,188名に、学士の学位記を授与いたしました。大学での学業を全うされ、船出される皆様に、名古屋大学教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。大学での勉学を糧に希望に満ちて旅立ちされる皆さんをお送りすることは、私ども教職員にとって、最上の誇りであり、喜びであります。皆さんに、心から拍手とエールをお送りします。

今日改めて卒業式を迎えているいろんなことを思い出していただきたいと思います。皆さんの学生生活は、充実してしまし

たか。どんなことが、心に残っていますか。きっと、沢山の喜びと、様々な失敗、挫折と成功、多くの出会いにあふれていることでしょう。

皆さんが学生生活を過ごしたこの4年間は、日本にとっても、大きく価値観が変換する時代でありました。中東で起きつつある政治変革の波や東日本大震災を目撃しつつある今、私たちは明治・終戦後に続く第3の時代の転換点に生きていると思います。その中で、君たちはとても幸福な学生生活を送れたことと思います。しかし考えていただきたいと思っています。この幸福は、君たちのお父さん、お母さんは勿論、多くの人々の支えによって実現したものなのです。また、震災に苦しんでいる同世代の人々には得ることのできない幸福なのです。だから、私達は、幸福を実感していることへの責任があるといえます。平凡に思える毎日が、実はかけがえのない幸福である事を改めて実感していると思いますが、自分の幸福を自分だけのものにしてしまうことのないようお願いします。

今日この卒業式を迎えるにあたり私からお願いしたいことは、名古屋大学を卒業する今日を境に、改めて自分自身何ができるか志を立てていただきたい。志は決してそんなに崇高なものではないんです。自分の持ち場、現場で自分がどういうことをしたら社会に貢献できるのか。人々の幸福を支えることができるか。よく考えて、自分なりの志を立ててください。

さて名古屋大学について少し触れさせて頂きます。今年、名古屋大学は、明治4年に尾張藩の仮医学校として出発してから今年で140年、1939年に名古屋帝国大学として総合大学になってから72年を迎えます。今皆さんのいる豊田講堂は、50年前に建築されましたが、先日文化審議会より登録有形文化財の指定を受けることに内定しました。一昨年の70周年を記念に、本日ご臨席の豊田章一郎全学同窓会長様のご支援により、全面的に改修されました。豊田講堂は、1960年当時のモダニズム建築の到達点を示し、そして私どもにとっては自由闊達な名大の学風を象徴するものと思います。

皆さんが在学中の4年間に、名大の歴史を飾る出来事がありました。一番記憶に残るのは、2008年に、名大を卒業された益川敏英先生、小林誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。更に、名大助教授であった下村脩(おさむ)先生がノーベル化学賞を受賞されました。同じ年に、2部門で3名の先生方が受賞した大学は、ノーベル賞の歴史の中でも極めてまれな存在だと思っております。皆さんが大学生活を送られた時期は、自由闊達な学風を誇りとする名大が、その70年の歴史の中で素晴らしい業績を生み出した

ことを実感できた時期、我々が素晴らしい大学で学ぶことができたことを体験できた時期でもあります。そこで、皆さんにお願いがあります。どうか、明日からは、母校・名大で学んだことを、生涯の誇りとしてしっかり活動して頂きたい。そして、卒業したら、10月にHome Coming Dayを開いておりますので必ず戻ってきてください。われらの象徴、豊田講堂でお会いしたいと思います。

それから、東日本大震災について、もう少しお話ししたい事がございます。今回の大震災が起こったあと、私は海外の提携校や友人から多数のメールを受け取っています。彼らがメールの中で異口同音に述べている事は、日本人には静かな強さがある。お互いを思いやる心がある。それを震災のビデオを見ながら感じておられます。そして彼らは「きっと日本は復興できるでしょう」と述べています。私は、改めて日本文化の持つ粘り強さ、素晴らしさを海外の友人から逆に教えられたような気がしております。

それから今、震災に苦しみ、必死に活動されている方々、津波から住民を救おうと活動し、不幸にして命を失われた若い方々がいっぱい見えますが、その方々が、私達に語りかけている事があります。それは、かけがえのない存在として、家族、友人を大切にしなければならない事です。それから、毎日毎日を真剣に、誠実に生きる事です。皆さんがこれから生きていく人生は決して平坦ではありません。しかし、これから皆さんが、どのような現場で働くとも、どのような立場になろうとも、またどんな事があろうとも、お互いを思いやり、誠実、真剣に生きていってください。それが、我々の抱えている困難を乗り越えて進んでいく道であると思います。これは、今回の大震災が私たちに残した大切な教訓であると思います。

今日の卒業式というのは、単純にこの4年間、試験に受かった単位を取った、卒業に到達したということを実感するだけでなく、名大生として、素晴らしい生活ができたことを改めて思い起こし、この君たちの幸せをどんな形でもいいから、少しでもいいからいろんな人に届けて頂きたい。というのがお願いです。

沢山の願いをしましたが、これから皆さんが、多くの方と出会い、いろんな体験をし、成長し続ける事を、心から祈っております。本日は卒業おめでとうでございます。

来賓祝辞（大学院修了式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような荘厳なる修了式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

本日大学院を修了された皆様に心よりお祝いを申し上げます。先ほど、総長より学位記を受け取られた代表の皆様それぞれが、素晴らしいお顔をされておりました。大学院でしっかりと勉学に励まれていたことが伺われ、大変うれしく思っている次第でございます。

まず、この場をお借りしまして、この度の東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。また、福島原子力発電所事故も予断を許さぬ状況であり、深く憂慮しております。被災地の悲惨な状況、避難生活をされている皆様のご苦勞に心を痛めております。この中にも、ご親族、ご友人などが被害にあわれた方もいらっしゃると思います。心よりご同情申し上げます。

今回の未曾有の国難とも言うべき事態を一刻も早く克服していくためには、日本人の一人ひとりが心をひとつにして、立ち向かっていくことが何よりも大切であり、まさに日本の底力が試されております。世界の人々の中には、日本人の勤勉さ、忍耐強さを評価して、必ずや日本は立ち直ると信じている方々も多いと聞いております。私も、日本人の底力を確信しております。

どうか日本の新しいリーダーになることを期待されている皆様には、日本が直面するこのような現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、高い志を持って、この国難に共に立ち向かい、それぞれの道を切り拓いて行って頂きたいと思っております。

さて、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下で、大学の法人化と国際化に対応した大学づくりを進めておら



れ、現在、中期目標・中期計画の達成に向けて努力されていると伺っております。地震被害の減災を目指して、昨年12月には「減災連携研究センター」を既に設立されており、今回の大震災においても、減災に貢献されるものと期待しております。

現在、日本は、産業・企業だけでなく大学もグローバルな競争の真っ只中にあります。私は、21世紀の名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。幸いにも、名古屋大学は政府が支援するグローバル30に採択され、今年の10月から英語だけで教育する外国人留学生の受け入れをスタートし、今後10年間で留学生を倍増する計画であると伺っております。さらに、大学院だけでなく学部学生も多く受け入れられることを通じ、国際競争力を高められることを確信しております。

私は、特に、名古屋大学が、モノづくりに特徴をもつ中部地区に位置する日本の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で、世界屈指の大学となることを期待しております。

そのためには、私は今年、創基140周年を迎える名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握してい

ただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。この目的を達成するため、名古屋大学は、全卒業生の電子名簿を整備中と伺っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し8年半がたちました。これまで、関東支部、関西支部、および遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴルおよびウズベキスタンの9つの海外支部を作って参りました。昨年10月のホームカミングデイでは、全ての海外支部の代表をお呼びして、濱口総長にもご参加いただき交流会を行いました。これらの名古屋大学の留学経験者は、名古屋大学に大変感謝されており、交流会では大変楽しい語らいを致しました。今後、皆様は海外でもご活躍されると思いますので、これらの支部をご活用いただければ幸いです。また、名古屋大学を支援するため、全学同窓会は同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費無料の「名古屋大学カード」を発行しております、是非ともこのカードに

入会していただき、名古屋大学の支援にご協力をいただきたいと思っております。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学ほか4大学の全体の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員は約7万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、ぜひ皆さんに学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、健康には十分ご留意され、名古屋大学大学院の修士生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



来賓祝辞（学部卒業式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような荘厳な卒業式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

本日卒業された皆様に心よりお祝いを申し上げます。先ほど、総長より学位記を受け取られた代表の皆様それぞれが、素晴らしい顔をされておりました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことが伺われ、大変うれしく思っている次第でございます。

まず、この場をお借りしまして、この度の東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。また、福島原子力発電所事故も予断を許さぬ状況であり、深く憂慮しております。被災地の悲惨な状況、避難生活をされている皆様のご苦勞に心を痛めております。この中にも、ご親族、ご友人などが被害にあわれた方もいらっしゃると思います。心よりご同情申し上げます。

今回の未曾有の国難とも言うべき事態を一刻も早く克服していくためには、日本人の一人ひとりが心をひとつにして、立ち向かっていくことが何よりも大切であり、まさに日本の底力が試されております。世界の人々の中には、日本人の勤勉さ、忍耐強さを評価して、必ずや日本は立ち直ると信じている方々も多いと聞いております。私も、日本人の底力を確信しております。

どうか日本の新しいリーダーになることを期待されている皆様には、日本が直面するこのような現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、高い志を持って、この国難に共に立ち向かい、それぞれの道を切り拓いて行って頂きたいと思っております。

さて、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下で、大学の法人化と国際化に対応した大学づくりを進めておら



れ、現在、中期目標・中期計画の達成に向けて努力されていると伺っております。地震被害の減災を目指して、昨年12月には「減災連携研究センター」を既に設立されており、今回の大震災においても、減災に貢献されるものと期待しております。

現在、日本は、産業・企業だけでなく大学もグローバルな競争の真っ只中にあります。私は、21世紀の名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。幸いにも、名古屋大学は政府が支援するグローバル30に採択され、今年の10月から英語だけで教育する外国人留学生の受け入れをスタートし、今後10年間で留学生を倍増する計画であると伺っております。さらに、大学院だけでなく学部学生も多く受け入れられることを通じ、国際競争力を高められることを確信しております。

私は、特に、名古屋大学が、モノづくりに特徴をもつ中部地区に位置する日本の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で、世界屈指の大学となることを期待しております。

そのためには、私は今年、創基140周年を迎える名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握してい

ただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。この目的を達成するため、名古屋大学は、全卒業生の電子名簿を整備中と伺っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し8年半がたちました。これまで、関東支部、関西支部、および遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴルおよびウズベキスタンの9つの海外支部を作って参りました。昨年10月のホームカミングデイでは、全ての海外支部の代表をお呼びして、濱口総長にもご参加いただき交流会を行いました。これらの名古屋大学の留学経験者は、名古屋大学に大変感謝されており、交流会では大変楽しい語らいを致しました。今後、皆様は海外でもご活躍されると思いますので、これらの支部をご活用いただければ幸いです。また、名古屋大学を支援するため、全学同窓会は同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費無料の「名古屋大学カード」を発行しております、是非ともこのカードに入会していただき、名古屋大学の支援にご協力をいただき



たいと思っております。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学ほか4大学の全体の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員は約7万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、ぜひ皆さんに学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、健康には十分ご留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



城所駐モンゴル日本国特命全権大使による特別講演会を開催

城所卓雄駐モンゴル日本国特命全権大使による特別講演会「モンゴルから見た日本、日本から見たモンゴル—よりよいパートナーシップ構築のために—」が、2月28日(月)、野依記念学術交流館において開催されました。

近年、鉱物資源開発で世界的な注目を集めている「草原の国」モンゴルは、厳しい自然環境、わずかな人口、大国に囲まれた内陸国といったハンディを背負いながらも100年にわたって独立を守り抜き、冷戦の終結にあたっては無血の民主化を遂げるとともに、「非核地帯化宣言」に代表される自主独立の外交を展開するなど、激動する東アジアにあって独自の存在感を誇っています。モンゴルは、日本を「第3の隣国」と位置づけて重視するとともに、昨年11月には「『戦略的パートナーシップ』構築に向けた日本・モンゴル共同声明」を発表するなど、日本にとって極めて重要な国となりつつあります。

本学は、モンゴルの大学・研究機関との学術交流を20年近く積み重ねてきており、平成18年にはモンゴル国立大学法学部に「名古屋大学日本法教育研究センター」を、平成



博物館を視察する城所大使



会場の様子

21年にはモンゴル国立科学技術大学に「名古屋大学フィールドリサーチセンター」を設置し、また大学院医学系研究科がモンゴル国立健康科学大学と学術交流協定を締結するなど、協力関係はさらに緊密になりつつあります。

講演会は、日本とモンゴル、本学とモンゴルとの密接な関係を背景に、本学をはじめとする日本の研究教育機関や企業・市民がモンゴルとどのように関わるべきかを再考し、示唆を得る機会とするために企画・実施され、学内関係者、一般の方など150名を超える参加がありました。

はじめに、濱口総長のあいさつの後、城所大使から、日本とモンゴルの交流史に関するエピソード、モンゴルの資源開発の歴史、モンゴルを取り巻く国際関係と日本に期待される役割などについて講演がありました。講演後は、活発な質疑応答が行われる等、モンゴルに対する関心の高さが伺われ、大変有意義な講演会となりました。

その他講演会に先立ち、城所大使は、濱口総長と意見交換し、次いで、博物館、年代測定総合研究センター、法政国際教育協力研究センター及び大学院環境学研究科のモンゴル関係施設を視察し、今後のモンゴルとの教育・研究交流促進について意見交換を行いました。

国際産学官連携セミナーを開催



あいさつする宮田理事

国際産学官連携セミナーが、3月10日(木)、名古屋市内のホテルにおいて開催されました。

同セミナーは、文部科学省イノベーションシステム整備事業大学等産学官連携自立化促進プログラム「国際的な産学官連携活動の推進」の一環として行われたもので、「米国の成功事例に学ぶこれからの技術移転」という副題のもと、今後の日本の大学における産学官連携活動のあり方を検討する上での参考となるような内容について話し合われました。

まず、産学官連携推進本部長である宮田理事から開会のあいさつがあった後、柴田純男米国ノースカロライナ州日本事務所代表から「ノースカロライナの概況とビジネス環境」について説明がありました。引き続き、スティーブンス・ケイシー ノースカロライナ・バイオテクノロジー・センター副所長が基調講演として「ノースカロライナ・バイオテクノロジー・センターの取り組み・戦略、ビジョン、コラボレーション」について、また、ヘルステック分野で著名なヘンリー・バーガー デューク大学技術移転局副局長が「米国大学における技術移転のトレンド、課題、そしてデューク大学の実践」について、事例を交え

ながら説明しました。

さらに、本学の米国における国際産学官連携拠点であるノースカロライナの国際産学連携拠点「NU Tech」の神山知久所長が、「NU Tech 活動紹介及び米国大学特許出願・活用戦略調査結果」について講演しました。

当日は、大学の産学官連携関係者、企業、自治体、特許事務所の方等53名が参加し、講演者の説明に熱心に耳を傾けていました。

特に、バーガー副局長の講演の中で、従来の大学における産学連携は、とすれば大学の研究成果を社会に単に移転するという発想が強いが、大学の研究成果を真に社会に受け入れてもらうには大学と社会が一緒になり、どうすれば大学の成果が社会に移行できるかの観点のもと、取り組むのが重要と認識し、産学連携活動を推進していると示唆しました。

日本の大学における産学官連携活動は、その開始から10年余りが経過し、今後自立化に向けて各大学とも対策を講じています。このような中で、同セミナーは産学官連携活動で長年にわたり実績をあげてきている米国の各機関による有益な情報を提供できた意義のあるセミナーとなりました。



会場の様子



出席者の質問に答えるケイシー副所長

第3回名古屋大学基金感謝の集いを開催

第3回名古屋大学基金感謝の集いが、2月19日(土)、豊田講堂において開催されました。

これは、同基金に100口以上の寄附をされた個人の方及び1000口以上の寄附をされた法人・団体に感謝の意を表するため感謝状及び記念品を贈呈するもので、3回目となる今回は、昨年2月以降に同基金に寄附をされた方々を対象



コンサートの様子

に行われました。

まず、濱口総長が、同基金の趣旨に賛同いただき、支援いただいたことに対する感謝の言葉を述べるとともに、本学の留学生数を現在の倍にするため、いただいたご寄附を優秀な留学生受け入れの奨学金として活用したいと話しました。

その後、総長から寄附者一人ひとりに感謝状及び記念品が贈呈されました。

引き続き、豊田講堂ホワイエにおいて、愛知県立芸術大学の教員の団体、「愛・知・芸術のもり 弦楽五重奏団」によるコンサートが開催され、感謝状贈呈式の出席者をはじめ、同基金への支援者は、素晴らしい演奏を楽しんでいました。

贈呈式後に行われた総長との懇談会では、出席した松尾 稔元本学総長など本学関係者と会話を交わす参加者の姿があらこちらで見受けられました。

平成22年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成22年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月1日(火)、南部食堂1階において開催されました。これは、今春、卒業・修了して、就職や帰国するなどで、本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を願い、本学での思い出の一つとなるよう開催されたもので、留学生と日頃お世話になっている留学生関係団体、留学生関係教職員など

約150名が参加して行われました。

最初に、濱口総長から激励及び祝福のあいさつがあり、続いて、宮田理事の発声により乾杯が行われました。会場では、総長や教職員、留学生関係団体の方々を囲んで和やかに歓談したり、記念撮影する留学生の姿があらこちらで見受けられました。

歓談の後に、名古屋大学留学生後援会からの記念品が後援会会長である総長から、各部局の卒業・修了代表者へ手渡されました。これに対し、卒業・修了留学生を代表して大学院教育発達科学研究科博士課程前期課程2年の李相燁さん(韓国)と大学院生命農学研究科博士課程前期課程2年の毛海萌さん(中国)の2人から、日本での留学の感想を含めた謝辞が述べられました。

最後に、石田留学生センター長から閉会のあいさつがあり、盛況のうちに終了しました。



あいさつする総長

産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）との連携・協力協定に基づく技術交流会が、3月2日（水）、産総研中部センター OSL 棟3階連携会議室において開催されました。

この技術交流会は、平成19年に連携・協力協定が締結されてから今回で通算8回目の開催となり、参加者は本学、産総研あわせて37名に上りました。



会場の様子

まず、宮田理事、上田完次産総研理事から開会のあいさつがあり、続いて、平成22年度に実施したFS研究の経過報告が行われました。発表は、新規採用のテーマが2件、昨年度からの継続テーマが2件、本学と産総研がペアを組んで、材料分野を中心に基礎研究に関わる研究成果、実用化へ向けて準備中の研究成果など、多岐に渡りました。FS研究開始から数年が経ち、特に実用化に向けて準備中の研究成果について、参加者から多数の関心、質問が寄せられました。

懇親会では、三留秀人産総研中部センター所長による乾杯の後、講演会だけでは時間が足りなかった参加者の間で意見交換が活発に行われ、盛況の内に閉会しました。

得意分野の技術・研究を互いに補完しながら、両者間の共同研究等における連携が強くなることが期待される技術交流会となりました。

ホタルの卵とミミズが光る話

大場 裕一 大学院生命農学研究科助教

しかるゝ、児の手に光る螢かな 也有

ホタルの光は、不思議と人々を魅了します。古今東西の研究者たちも、生物の発光現象には無関心で居られなかったようです。

名古屋大学は発光生物の研究と縁がとても深く、これまでに何人もの優れた研究者を生み出しています。なかでも、平田義正博士（名古屋大学名誉教授）の門下だった下村脩博士（現・名古屋大学特別教授）はご存知でしょう。1950年代に名古屋大学理学部でウミホタルの研究を行った後にアメリカへ渡り、発光クラゲから発見した GFP（緑色蛍光タンパク質）の功績により2008年にノーベル化学賞を授与されました。私も、この「本学のお家芸」とも言うべき発光生物の研究を今に引き継いでいる者のひとりです。

ホタルの成虫が光ることは誰でも知っている

と思いますが、卵も光ることはよほど詳しい人しか知らないでしょう。成虫と比べると弱い光ですが、じっと目を凝らすと確かに緑っぽく光っています。今回、私たちの研究グループでは、今まで知られていなかった新しい発光酵素（ルシフェラーゼ）遺伝子がゲンジボタルの卵の発光に関わっていることを発見し、新聞にも紹介されました。これまでに知られていた成虫のルシフェラーゼは黄色に発光しますが、私たちが見つけた卵のルシフェラーゼは緑色に発光します。ホタルの発光に関する研究は、60年代～80年代に名古屋大学やジョーンズホプキンス大学などのグループが徹底的に行ったので、もうすべて解明され尽くしたかのように思われていましたが、「卵」という思いがけないところにまだ新発見があったわけですね。

私たちは、ホタルの卵から見つけたこの新しい遺伝子を、ゲンジボタルの学名 (*Luciola cruciata*)

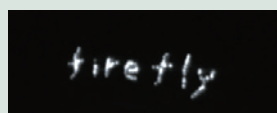


図1 ゲンジボタルの卵をならべて発光の様子を CCD カメラで撮影した（白黒写真）。firefly とは英語でホタルのこと。「firefly egg」と書きたかったが途中で卵が足りなくなりました。卵の直径は約0.5ミリ。

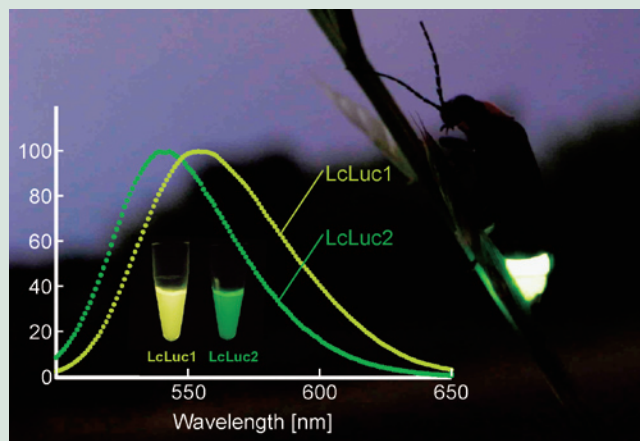


図2 黄色に光る成虫のルシフェラーゼ (LcLuc1) と今回発見した緑色に光る卵のルシフェラーゼ (LcLuc2) の発光スペクトル。試験管の写真は、その発光するようす。

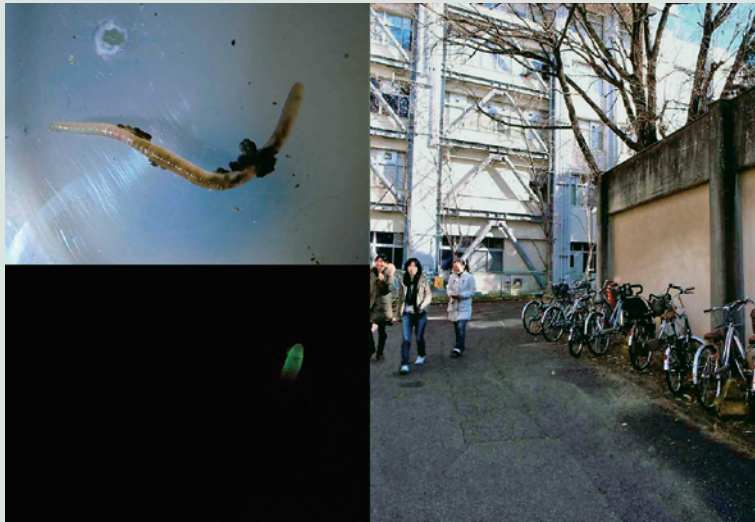


図3 名古屋大構内で見つけたホタルミミズ(体長約15ミリ)(左上下)と発見した駐輪場(右)

の頭文字と「第2のルシフェラーゼ」という意味でLcLuc2と名付けました。このLcLuc2は、すぐに何かの役に立つというものではありませんが、ホタル1種につき1つしかないと思われていたルシフェラーゼ遺伝子がもうひとつ見つかったことで、発光生物の理解が今後より深まってゆくだろうと考えています。たとえば、遺伝子配列を比較した結果、この第2のルシフェラーゼは、ホタルの仲間(ホタル科)の共通祖先がいた頃(おそらく白亜紀ころ)からすでに持っていたことがわかりました。卵を光らせるだけ(?)の酵素を恐竜の時代から今もずっと持っているのですから、それには我々がまだ知らない何か特別な理由がありそうです。

さいごに、「知の先端」とはあまり関係のない私のささやかな「発見」をご紹介します。それは、

名古屋大学のキャンパス内で発見した「ホタルミミズ」についてです。ホタルミミズは、その名のとおり光るミミズです。とても珍しいとされ、日本国内でもまだ20例程度しか発見報告がありません。ところが、今年の1月に私は本学東山キャンパス内の駐輪場からこのホタルミミズを発見しました。それほど期待せずにスコップで土を掘ってみたらいきなり見つかったのです。愛知県では初記録、東海地方でも63年前に三重県津市で見つかった以来の発見で、新聞やテレビにも紹介されました。本学東山キャンパス内にはヒメボタルが生息していますが、今回のホタルミミズが加わって、名大の発光生物は2種類になりました。発光生物研究の歴史を築いてきた名古屋大学にふさわしい発見ではないかと内心誇らしく思っています。

1997年総合研究大学院大学分子生物機構論専攻博士後期課程修了、博士(理学)、2000年名古屋大学大学院生命農学研究科助手、2007年より現職
 専門：発光生物学、進化生物学
 モットー：誰もが直感的に面白いと思える研究がしたい
 趣味：浮世絵などホタルに関連する文化資料の蒐集。夏目漱石の熱烈なファン

おおば ゆういち



ヒトの情報処理過程についての研究

リハビリテーションでは、脳血管疾患、神経変性疾患、骨関節疾患、精神疾患、発達障害、認知症などさまざまな疾患を持った対象者に対して治療的介入を行っています。これら疾患に伴う機能障害の原因には末梢性の問題以外に、中枢性、つまり脳機能に何らかの問題が生じていることが少なくありません。また、脳機能画像解析技術の進歩により、治療介入の効果が脳機能の変化（脳の可塑性）として確認されるようになってきました。このように、近年のリハビリテーションは脳機能など神経科学分野の知見を取り入れながら進められるようになり、ニューロリハビリテーションという言葉も多く聞かれるようになりました。このような流れの中で私はリハビリに関わる作業療法士として、対象者の理解のため、脳波の測定によりヒトの脳における情報処理過程についての研究を行ってきました。

脳波測定により記録されるものには、ある事象（刺激）に関連して起こる事象関連電位（Event-related Potentials: ERP）というものがあります。このERPのうち注意、記憶、弁別に関連するとされているP300という成分について、ある脳機能に関連づけた刺激を用いることで、特定の脳機能を捉えることを行いました。最近では、ヒトの認知機能に必須であると言われている作動記憶（Working Memory: WM）について、条件を変えた言語刺激を呈示することで、WM機能の評価方法の検討を行いました。結果、3.5倍速という速さまでの言語刺激では、その内容理解が意識で

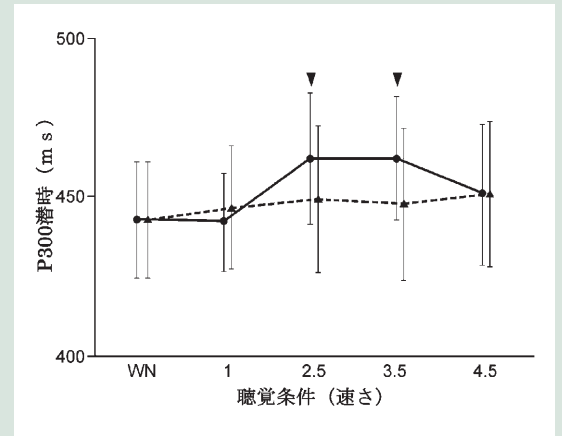


図1 聴覚刺激条件によるP300潜時の変化2.5倍速3.5倍速条件ではP300潜時が延長する(▼)

きなくとも脳はある程度は言語刺激として処理を行っているということが分かりました(図1)。さらに、その処理過程におけるWM機能の関与をP300の変化として捉えることができました。この研究結果は、ヒトのWM機能についての理解に繋がるものと考えています。これらの基礎的データはすぐに臨床の場に直結するという訳にはいかない場合もありますが、これら基礎的な知見を地道に蓄積していくことにより、リハビリテーションにおける対象者の理解につながり、さらには有益な治療介入に繋がるものを信じています。今後は、脳波測定だけでなく、脳磁場測定(図2)などにより、より詳細な脳機能測定を実施していきたいと思えます。

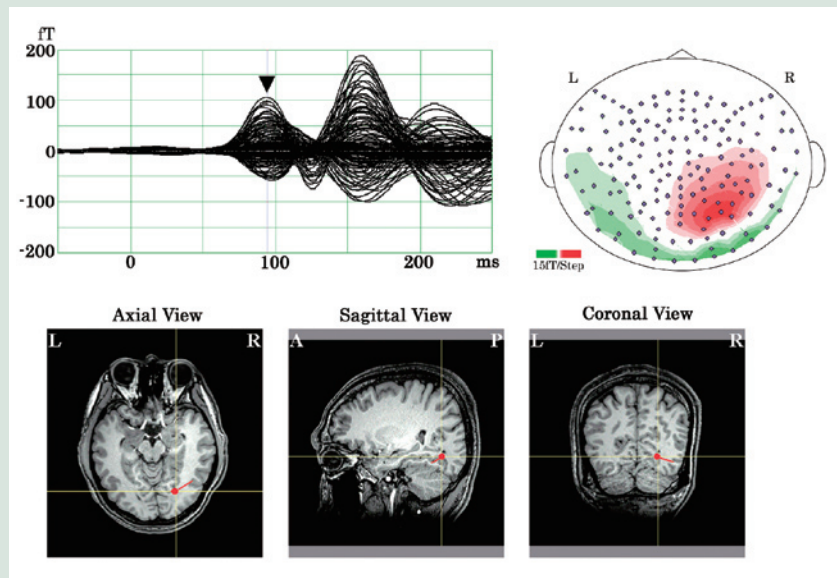


図2 脳磁図の測定
視覚刺激に対する第一次視覚野の反応(上段左図: ▼)と電流源の位置(下段: 赤線)

平成22年度名古屋大学総長顕彰
9名2団体表彰

平成22年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月25日(金)午後4時より、豊田講堂第1会議室において行われ、9名の学生と2団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために、平成15年度に創設されたもので、顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に8件の学部推薦が、「正課外活動への取り組み」部門に自薦・他薦を合わせて14件の応募がありました。

これら合計22件の推薦・応募について、理事、部局長等で構成する総長顕彰委員会での審査の結果、「学修への取り組み」部門で8名、「正課外活動への取り組み」部門で1名・2団体が受賞しました。

授与式終了後は、総長と受賞学生との懇談会が行われ、和やかな雰囲気の中、総長から学生へ将来への激励とともに、活発な意見が交わされました。

全体の講評

今年度で8回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募の学生達は、意欲や姿勢、各活動への熱意や情熱が感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

また、受賞した学生・団体は、名古屋大学の目指す「勇気ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く名大生の目標となりうる人材としての成長を望みます。

「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
原 ともこ 朋子	文学部人文学科4年	古代の文章を読んで理解することにとどまらず、資料が少ない中で、時代背景をも含めた情報を収集し、課題を解決する能力、また、資料を入念に精査し、論理的に思考する能力は、大学4年間の努力の賜物といえる。学修以外においても課外活動を通じて、多くの仲間と共に協調し、向上意識を持って臨んでいた結果、大きな成果を上げている。今後は教育職として勉学を教えるだけでなく、努力する姿勢が後輩たちの良い模範となることが期待できる。
なかね あやか 中根 綾香	教育学部人間発達科学科4年	研究報告の少ない発達障害児の描画発達に関する研究を卒業論文のテーマとして掲げ、地域の幼稚園に頻繁に通い、発達障害児のボランティアを通して、対象児の行動や描画の変化を詳細に記録し、子供の社会性と描画の関連を自ら導き出すことができたことは、熱意と意欲の表れといえる。今後は大学院に進学し、更なる研究活動に取り組んでいくことが期待できる。
くまがい よしのり 熊谷 欣典	法学部法律・政治学科4年	社会に出たときに自己の能力を如何に発揮することができるかという明確な問題意識を持ち、学修においては、成績全体の半分以上『優』を取り、『可』を取らないようにするという明確な目標を持って臨んだ結果、非常に優秀な成績を収めることができた。また、講義だけでなくゼミの活動にも力を注いだ結果、例えば、「日経テスト」で2位入賞というすばらしい結果を残した。その他、課外活動においても、インターンシップや学内行事に積極的に参加したり、サークル活動を通じて社会とのつながりを認識するなど、社会で活躍が期待できる基礎を築けたといえる。
うちだ やまひろ 内田 康弘	経済学部経営学科4年	附属中学・高校6年間で、問題意識を持ち、それに向かってまっすぐにながむしらに進むことを学び、大学に入学してからも積極的に知識の習得に努めた。特に卒業論文のテーマとして掲げた教育学には、教育学と経済学の両面からその関係性について考察し、独自の見解を導き出していった。今後については、本学の大学院教育発達科学研究科に進学し、教育学についての知識を更に深めていくものと考えられる。
つつい こうた 筒井 康太	情報文化学部自然情報学科4年	大学で最も力を注いだ卒業研究では、世界初の試みとしてビデオカメラを装着したカツオドリの観察を行った。実際に現地に出向き、カツオドリの雛を保護し、責任をもって辛抱強く育てながら、ビデオカメラのデータを解析し、他個体との社会的相互作用を行いながら成長する姿を調べていった。研究過程で学んだ新しい分野に飛び込む積極性や困難に立ち向かう姿勢は、今後の大学院での研究にも役立たせてくれるものと期待できる。
とねがわいりな 利根川玲奈	医学部医学科4年	他大学薬学部卒業後、本学医学科に編入し、他大学における成績はもちろんのこと、本学においても優秀な成績を収めた。薬学部での知識を生かし、さらには薬学部では成し得なかった医学的な観点からも研究を重ねようとする熱意はすばらしい。こういった研究活動への取り組み姿勢が認められ、ストックホルム国際青年科学セミナーのメンバーに選出された。授賞式をはじめとするノーベル賞関連行事に参加し、科学技術について受賞者や他国からの研究者と討議し、多くの刺激を受けたことは、今後の研究にも大いに役立たせてくれるものと期待できる。
ほりべ たいし 堀部 太嗣	工学部理工学学科4年	化学の発展には材料の開発が必要不可欠と考え、人々の生活に役立つ材料の開発を目指して、熱心に勉学と研究に取り組んできた。講義において、板書だけでなく、教員からの有意義な情報を書き込み、独自のノートを作成し、レポート等の課題に対しては、講義終了後早めに取りかかることにより講義の一層の理解を深めることができた。その他、将来、研究において国際的に活躍することを志望しており、英語に対しても努力を重ね、TOEICのスコアを伸ばすことができた。卒業後進学する大学院においても、国際的に活躍する研究者になることが期待できる。
ほせがわ なおみ 萩原 尚文	農学部応用生命科学科4年	講義に積極的に臨む姿勢は、優秀な成績に表れているのももちろんのこと、講義以外の場面においても豊富な知識を生かし、友人たちのリーダー的存在として、疑問点を解決すべく議論を重ねたり、図書館を利用したりなどにより解決をはかってきたことにも表れている。卒業研究においては、先輩が未解決のまま残っていたテーマに取り組み、様々な実験、考察を重ね、ほぼ解決する段階に至ったことは、非常に評価できる。

「正課外活動への取り組み」部門

氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
かきつ なみ 垣津 奈美 (情報科学研究科 M2)		正課外活動 (部活動) 正課外研究活動	大学院の研究の傍ら、陸上競技部に入学し、中長距離の選手として目覚ましい結果を残してきた。特に、10月に行われた全日本女子駅伝に、強豪の私立大学と肩を並べて出場できたことは、本学にとっても、陸上競技部にとっても誇りあるものとなった。部活動の活躍も目を見張るものがあるが、大学院の研究においても、学会での発表や学会誌への投稿など精力的に取り組んでおり、文武両道を兼ね備えた優秀な学生として、他の学生の模範になっているといえる。
名古屋大学 TABLE FOR TWO プロジェクト	やまぐち まさよし 山口 真義 (経済学部4年)	社会貢献活動 本学への貢献活動	学生自ら考え、始めたプロジェクトであり、このプロジェクトを通して、市民に放置自転車という社会問題を意識してもらい、住みよい環境作りを目指すという政策が、名古屋市の方針として取り上げられたことは、社会への貢献として評価できる。また、この取り組みがメディアにも取り上げられたことにより、本学の名誉を高めたことも評価できる。
名古屋大学 TABLE FOR TWO プロジェクト	やまぐち まさよし 山口 真義 (経済学部4年)	社会貢献活動 本学への貢献活動	1食食べるだけで国際貢献ができる、手軽に簡単に参加できる国際貢献として、生協食堂部と協力し始めたこのプロジェクトは、開発途上国の子供たちに給食を届けることを目的としているが、メニューをヘルシーにすることで本学教職員・学生の健康を促進させることにも貢献している。東海地区でこのプロジェクトに参加しているのは、本学を含め2校のみであり、本学においても昨年始めたばかりではあるが、東海地区においてリーダー的存在を目指しており、今後の活動に期待が持てる。

平成22年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

目標を持ち努力し続ける事



研究室で史料読解中

私は高等学校の教員となるにふさわしい高い学力と人間力をつけたいと思い4年間努力してきました。

専攻である日本史学では古代史を中心に学習し、卒業論文は古代の奏楽について論じたいと考えました。しかし、奏楽のみ研究しても日本史学の論文としては適当でないと思い、国家論・天皇制等古代史の広い分野の論文を読みあさり、史料も丁寧に読み解いて、古代の儀式と奏楽、天皇の関係について明らかにしました。

大学の4年間を通して、日本史の知識だけでなく、

原 朋子 文学部人文学科4年

物事に向かう時のプロセス、論理性など、課題を立ててそれを解決するための姿勢を学びました。また、努力し続けることで生まれる力の大きさも感じました。

この4年間の成果として、教員採用試験にも合格することができました。春からは高等学校の教員となりますが、大学で学んだことを生かし生徒達にもそれを伝えていける教員となれるよう努力し続けていきます。

はら ともこ 1989年生まれ 岐阜県出身

「学修への取り組み」部門

夢を現実にするために



園児の描画の一部と一緒に

私は中学生の頃に経験したあるボランティアをきっかけに『発達障害児や両親のサポートがしたい』という漠然とした夢を抱くようになりました。高校生になって『臨床心理士』という資格の取得が夢を実現する道であることを知り、教育学部に入りました。入学後は心理学の授業を中心に楽しく充実した学修でした。

卒業論文では、幼稚園で一般幼児の描画と社会性の関連を縦断的に調査するとともに、知的障害の園児さんの発達の支援に挑戦しました。研究を進

中根 綾香 教育学部人間発達科学科4年

めることの難しさを痛感した反面、子ども達の変化を目の当たりにして、非常に貴重な体験ができたと感じています。発達支援をしてきた園児さんも対人的社会性が1年間の間に顕著に発達し、成長へのサポートが出来たことを喜ばしく思っています。

4月からは大学院に入學します。ようやく『臨床心理士』の資格へのスタートラインに立てたのだと考え、研究と勉学に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

なかね あやか 1988年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

社会で活躍できる人材になるために



自宅で新聞をチェックしているところ

私は、社会に出て活かせる能力を身に付けるという意識を持って、学生生活を過ごしました。

具体的には、講義は勿論、ゼミ活動やインターンシップ等、大学が提供する様々な学修の機会を活用しました。例えば、ゼミ活動では、法律と経済が深く関係する会社法のゼミを選択しました。そこでは、ゼミ活動の一環として日々、新聞や論文を読みあさり、法律のみならず経済社会全般の見識を深めました。そして、ゼミ代表としてゼミ生を巻き込み、日本経済新聞社主催の経済社会全般の知識を問

熊谷 欣典 法学部法律・政治学科4年

う「日経 TEST 学生団体対抗戦」に参加し、全国第2位という結果を残すことができました。ゼミ活動では、「知識の幅を広げる姿勢」と「周りを巻き込む力」を身に付けることができたと考えています。また、この2つは社会に出て必ずや活かせる能力だと確信しています。

これからも、社会で活かせる能力の会得を常に意識して、日々努力していこうと思います。

くまがい よしり 1988年生まれ 北海道出身

「学修への取り組み」部門

“10年間 + a” の名大生活



ピアノと学修の両立を目指して

興味・関心のあることを、自分が納得するまでやり尽くす。名古屋大学教育学部附属中学校入学時から10年間、私は名古屋大学という恵まれた環境の下で日々様々な学修を重ねてきました。

大学1・2年次では、中学時代から興味を抱いていた“音楽と経済の関係性”の研究を進め、音楽業界における企業経営の実像について独自の分析を試みました。大学3・4年次では、これまで行ってきたピアノと学修の両立に加え、教職科目と教育学部の専門科目を新たに履修し、教育学と経済学

内田 康弘 経済学部経営学科4年

の両面からそれらの関係性について分析を試みました。その集大成である卒業論文では、『経済発展と教育』というテーマで、経済発展における教育の重要性について論じました。

今後は大学院教育発達科学研究科に進学します。附属学校6年間、経済学部4年間で学修した内容を十分に生かしつつ、経済発展と教育、教育と社会の関係性についての研究をさらに深めていきたいと考えています。

うちだ やすひろ 1988年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

自分自身の探求～大学生活を振り返って～



卒業研究でカツオドリを飼育している（餌を与えている）様子

情報文化学部で理系・文系問わず幅広く様々な分野を学ぶ中で、私は動物の社会システムに興味を持ちました。そして卒業研究では、沖縄県の西表島に約半年間滞在してカツオドリという海鳥の雛を飼育し、飛べるようになった雛に対して小型のビデオカメラやGPSデータロガーという情報機器を装着することで、成長期の海鳥における他個体との社会的相互作用について研究しました。ビデオカメラから得られたカツオドリ目線の映像は、おそらく今までに誰も見たことがない映像であり、とても面

筒井 康太 情報文化学部自然情報学科4年

白く、やりがいを持って研究に取り組むことができました。

私はこの卒業研究や西表島での滞を含めた、情文生としての4年間で、様々な面から自分自身について考えることができました。4月からは大学院に進学し、卒業研究の内容をさらに深く研究していきたいと思っています。そして、この4年間で身につけたことや感じたことを生かし、自分をさらに成長させていきたいです。

つつい こうた 1988年生まれ 長野県出身

「学修への取り組み」部門

総長顕彰受賞にあたって



ノーベル化学賞受賞の根岸英一先生夫妻と、SIYSS日本代表の片岡君と

私の夢は、神経変性疾患の根本的治療法を開発することです。私は、東京大学薬学部薬学科を卒業後、薬学的なアプローチにとらわれず、より医療に即した研究をしたいと思い、名古屋大学医学部医学科に、3年次学士編入制度で入学しました。名古屋大学の医学部では、学部生でも積極的に研究活動に参加できる環境が用意されていました。私は、貝淵弘三教授の研究室に所属し、神経細胞の極性形成に関する研究に取り組んでいます。

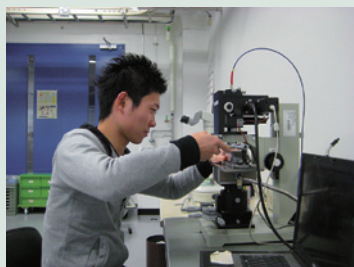
利根川 玲奈 医学部医学科4年

昨年は、研究への取り組みが認められ、ストックホルム国際青年科学セミナーの日本代表に選出され、ノーベル賞授賞式に参加させていただきました。受賞者の方々と、世界中から集まった熱意にあふれる研究者の方々との交流を通じ、「科学研究には夢がある」と、改めて強く実感しました。この貴重な経験を糧に、今後も研究活動に精進していきたいと思っています。

とねがわ れいな 1986年生まれ 東京都出身

「学修への取り組み」部門

新材料の創製のために



物質を超高压で加圧中

私は、「新しい材料を開発したい」という夢を叶えるために、物理工学科材料工学コースに進学しました。材料に関する基礎を固めるために、講義は集中して取り組みました。独自のノートを作成し、講義内容が分からないという友人にはノートをもとに説明し、友人と共に自分自身も理解を深めました。

また、世界の人々とコミュニケーションをとるときが来るだろうと思い、得意ではなかった英語を勉強しました。TOEICテストなどを通じて語学力を高めることができました。

堀部 太嗣 工学部物理工学科4年

4年次には、物質を超高压で圧縮し、新しい材料を創製している研究室に配属されました。私は、圧縮している物質を加熱する装置の開発に成功し、その装置を用いて材料を合成しました。

来年度から大学院に進学します。国際学会等に参加し、積極的に様々な文化の人々と意見交換をしていきたいと考えています。新材料の創製のため、これからも頑張り続けていきたいと思っています。

ほりべ たいし 1988年生まれ 岐阜県出身

「学修への取り組み」部門

大学という出会いの場



現在研究対象としているウニ (*Hemicentrotus pulcherrimus*) と私

私は、小さな頃から生命の持つ不思議さにとっても興味があり、庭に植えた大きな豆が発芽し成長していくのを毎日掘り返しては観察するなんてことをするような子供でした。私が名古屋大学に入学したのは、その「生命」についてより多くを学び、その中から本当に心惹かれるものに出会うことができた、という思いからです。そのために、とにかく様々な講義を受講しました。いつどんな形で求めるものに出会えるか分からないからです。

そうして私は今、「糖鎖」という学問分野に出会

萩原 尚文 農学部応用生命科学科4年

いその研究に携わっています。ウニの卵細胞表面に局在する機能糖鎖の解析というテーマです。糖鎖は、DNA、たんぱく質に次ぐ第3の生命鎖と呼ばれ、これから益々発展していく未開発分野のひとつで、とてもやりがいを感じています。しかし、単に個人の知的欲求を満たすことにとどまらず、いつか社会全体の利益に貢献できる日が来ることを目指して、日々取り組んでいます。

はぎわら なおふみ 1988年生まれ 長野県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（部活動）・正課外研究活動

『夢』への挑戦 —可能性を信じて—

垣津 奈美 大学院情報科学研究科博士課程前期課程2年



全日本インカレ女子5000mで8位入賞した際のゴールシーン

私は、運動による脂質代謝と呼吸ガスとの関連性について研究を行ってきました。この分野は未発見の部分が多く、私自身、研究によって多くの発見や好奇心を得ることができました。

学業に加え、大学院より本学へ入学し、一陸上競技部員として活動してきました。中学から始めた陸上ですが、私にとってこの2年間の競技生活はかけがえのない時でした。純粹に走るのが楽しい、でも競技生活の中でそう思えず、走る理由が分からなくなり、挫折しようとした時期がありました。そん

な私がここで得た最も大きなものは走る楽しさを出させてくれたことだと感じています。全日本インカレ5000m 8位入賞、全日本大学女子駅伝出場などといった結果を残してきましたが、自分1人の力では何もできませんでした。指導者や多くの仲間の支え、周囲の方々の理解があってこそこの結果です。今後も自分自身の可能性を信じ、更なる飛躍を目指し日々の努力を積み重ねていきたいと思っています。

かきつ なみ 1985年生まれ 岐阜県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会貢献活動

社会の問題を逆利用

名チャリプロジェクトチーム

八木 俊信 大学院環境学研究科博士課程前期課程2年



名チャリ貸出風景（2009年度社会実験）

社会の為に何が出来るか。考える一歩を踏み出し、行動し踏み越えることが大切だと考えています。私達にとって、それは自転車の新しい利用方法を提案することでした。

安価であるだけでなく、温室効果を出さないことから自転車が目立っています。しかしその一方で、まちを歩いていると放置自転車が非常に多いことに気がつきます。名チャリプロジェクトはそのような背景の中で生まれました。

名チャリは、名古屋中心部に自転車の駐輪場を

配置し、そこで自転車の貸出と返却を行う取り組みです。放置自転車の削減や、クルマから自転車に移動手段をシフトさせることによる温室効果ガスの削減が期待できます。またそれだけでなく、普段クルマや電車で通り過ぎてしまう所を自転車で走ることにより、面白そうなお店やレストランを発見するなど、街の振興も期待できます。放置自転車というまちの「問題」を有効に利用することで、より快適なまちを創ることが目標です。

やぎ としのぶ 1986年生まれ 広島県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会貢献活動・本学への貢献活動

気軽な国際貢献。学食でご飯を食べるだけ。

名古屋大学 TABLE FOR TWO プロジェクト

山口 真義 経済学部経済学科4年



ミーティングで導入案を議論する様子

世界の約70億人の人口のうち、10億人が飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する生活習慣病に苦しんでいます。この「世界の食の不均衡」を解消するため、私たちは名古屋大学生協と協力して、TABLE FOR TWO というプログラムを生協食堂で実施しています。

このプログラムは世界経済フォーラム出席者が考案したユニークなもので、対象メニューを食べるだけでアフリカの子どもたちに寄付ができるというものです。

気軽に国際貢献ができる仕組みに惚れ込んだ私たちは、本学食堂にプログラムを導入するため、2010年春から情報収集や導入案の作成・提案を行い、同年秋に導入を実現しました。

2011年3月までに約10万円（5000食分）の寄付をアフリカに届けています。

今後も導入食堂を拡大するなど、より多くの学生・教職員が気軽に国際貢献できる仕組みを、生協とともに作り続けていきたいと思っています。

やまぐち まさよし 1986年生まれ 愛知県出身

文学研究科公開シンポジウム「マンダラと論理のインド」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月5日(土)、文学研究科237講義室において、文学研究科公開シンポジウム「マンダラと論理のインド」を開催しました。これは、人文学における最新の研究成果を社会に公開するため、毎年3月に開催しているもので、今回で11回目となります。

まず、羽賀文学研究科長のあいさつに続き、和田壽弘同



会場の様子

研究科教授からシンポジウムの趣旨説明がありました。その後、立川武蔵愛知学院大学文学研究科長が「マンダラとは何か」と題する講演を行い、インドにおけるマンダラ成立の歴史的背景、マンダラの構造・機能について紹介し、現代人にとってのマンダラの意義について語りました。

引き続き、研究報告が行われ、まず和田教授が「インド人の脳に映った世界」と題し、インド思想を理解するためのキーコンセプトを紹介し、キーコンセプトからインド諸思想を類型化しました。次に、畝部俊也文学研究科准教授が「越境する仏教写本」と題し、オックスフォード大学に所蔵されているタイの絵入り仏教写本を紹介し、文献学や図像学の境界を越えて研究され始めたこと、写本が東南アジア仏教の特徴を示すことを報告しました。

同シンポジウムは、論理が無いと見えるマンダラなどのような世界にも、確かな論理が働いていることを訴える試みであり、インドを通して日本人について考え直すきっかけとなる意義深いものとなりました。

複合材工学研究センターシンポジウム11を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科附属複合材工学研究センター(CERC)は、2月18日(金)、野依記念学術交流館において、「CERCシンポジウム11」を開催しました。今回は、一昨年2月の設立時から3回目のシンポジウムになります。

最初に、鈴置工学研究科長が、複合材工学研究の背景や同センターの位置付けを紹介した後、上田附属複合材工学



会場の様子

研究センター長から、平成21年度に導入した「複合材研究システム」など、今期のセンターの活動概要報告が行われました。

講演は、複合材技術に関する依頼講演3件、センター研究内容紹介3件に加えて、あらたな試みとして、モノづくりをしている企業からの技術講演3件が行われました。依頼講演の一つは、昨年フランスのニースで行われた国際航空科学会議(ICAS)において、最優秀学生賞に輝いた王立メルボルン工科大学の大学院博士課程在籍の大学院生によるもので、生物体を参考にして複合材の継ぎ手を考えるユニークな内容で注目を集めていました。

シンポジウムは公開自由参加の形で行われましたが、同センターの設置目的である地域密着型の研究拠点を形成することを反映して、中部地区の複合材料に関心を持つ企業から多くの参加者がありました。また、講演会の終わりには、複合材研究システムの構成装置の見学会があり参加者の関心を引いていました。

国際開発研究科創立20年記念シンポジウムを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、3月4日(金)、経済学部第2講義室において、同研究科創立20周年記念シンポジウムを開催しました。

まず、渡辺副総長のあいさつ、大貝隆之国際協力機構中部国際センター所長による祝辞があった後、木村宏恒国際開発研究科教授による『国際開発学入門』出版につ



会場の様子

いての紹介、岡田亜弥同教授による日本学術振興会「アジアアフリカ学術基盤形成事業」の実施についての報告、藤川清史同教授による国際開発学会2011年大会の実施予告、島田 弦同准教授による同研究科同窓会活動報告などが行われました。

引き続き、同研究科の初代研究科長である小川英次名誉教授による「名古屋大学と国際開発学研究の20年」と題した記念講演が行われました。小川名誉教授は、世界における新興国の台頭、日本の高齢化問題などを視野に、技術移転をキーワードとして、信頼を軸にしたマネジメントの重要性を強調するとともに、この20年を回顧し、未来について語りました。

その後、パネルディスカッション「国際開発学研究の現代的課題」が、長田 博同研究科教授をコーディネータ、小川名誉教授、中條直樹名誉教授、潮木守一名誉教授、同研究科の修了生として澤木聖子滋賀大学教授、島田 弦同研究科准教授、サヴェリエフ・イゴリ同准教授をパネリストとして行われました。

100名以上の出席者があり、盛況のうちに閉会しました。

第3回「開発のためのアジア学術ネットワーク」国際セミナーを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、3月5日(土)から7日(月)の間、豊田講堂及びシンポジオンホールにおいて、第3回「開発のためのアジア学術ネットワーク (ANDA)」国際セミナーを開催しました。

5日は、国際シンポジウム「グローバル化時代のアジアにおける新たなダイナミズムの胎動と産業人材育成」を開



会場の様子

催し、アジア11カ国から研究者や国際機関職員が参加したほか、大学院生、関係機関職員、一般の方々等約130名が参加しました。

開会セッションでは、濱口総長による開会のあいさつの後、井上正幸元バングラデシュ大使、浅井孝司文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長、加藤 久日本学術振興会国際事業部長などの来賓による祝辞があり、同事業のリーダーである岡田亜弥国際開発研究科教授による概要説明が行われました。続いて、長谷川真一国際労働機構駐日事務所長代表及び磯貝匡志トヨタ自動車株式会社常務役員による基調講演が行われました。その後、「アジアの途上国における産業人材育成の機会と課題」と題し、ゴヴィンダン・パライル国連大学副学長、廣里恭史アジア開発銀行首席評価専門官、トー・ムン・ヘン シンガポール国立大学准教授、クリシュナン・ナラヤナン インド工科大学ボンベイ校教授によるパネルディスカッションが行われました。

6、7日は、2つの学生セッションを含む11の学術セッションにおいて、ANDAの拠点大学の研究者や国内の研究者・大学院生による合計30本の研究報告と活発な討論が行われました。

国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅱ」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、3月7日(月)、8日(火)の両日、文系総合館カンファレンスホール等において、国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅱ」を開催しました。今回は海外から4名の研究者を招へいし、2日間にわたり討議が行われました。

初日は、前野国際言語文化研究科長のあいさつに続いて、



発言するリヨネ教授

田所光男同研究科教授が、同シンポジウムにおける「新しい総合科学『比較マイノリティ学』の構築を目指す」という趣旨について説明を行い、それを受け、フランソワーズ・リヨネカリフォルニア大学教授、シーラ・ウォン モーリシャス大学上級講師、小池理恵富士常葉大学准教授が、多民族国家モーリシャスを対象に、クレオール性やコスモポリタニズムの観点から、マイノリティ共生の問題を追究しました。

2日目は、ネパールのナンダ・シン トリブヴァン大学准教授が、憲法起草中の同国におけるエスニック・マイノリティの多様な運動について詳述し、徐冰 東北師範大学教授が、日中衝突の原因を探求して双方のもつ「傲慢と偏見」の歴史を分析しました。最後に布施 哲同研究科准教授が、現代西欧のアソシエーション理論を分析しつつマイノリティ状況の未来を展望しました。

両日とも同研究科博士課程後期課程学生の研究発表も行われ、長畑明利、藤井たぎる両国際言語文化研究科教授がチェアマンとなって、全体として、マイノリティ状況から新たな共生を模索するという21世紀の世界の切実な課題について、討議が行われました。

国際シンポジウム「日本研究における内外の視点」を開催

●大学院国際言語文化研究科

国際シンポジウム「日本研究における内外の視点」が、3月4日(金)から6日(日)の間、全学教育棟及び西尾市岩瀬文庫において、開催されました。

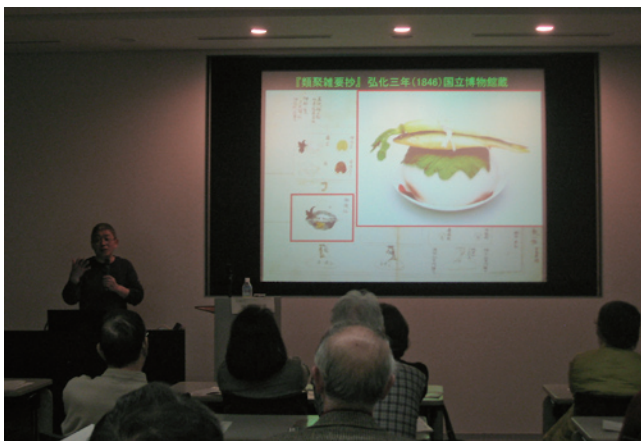
海外に流失した多くの絵巻、絵入り本、合巻は欧米を中心とした様々な図書館、美術館に所蔵され、それらの資料を使用した日本研究が、外国人研究者を中心として盛んに

行われています。今回は、カナダ ブリティッシュコロンビア大学に所属する研究者2名、フランス 国立図書館写本室和本部門主任研究員、絵巻や絵入り本を中心に研究する若手研究者2名の他、本学の研究者3名が、蓄積された研究成果や情報を相互に出し合いました。

研究者は、海外流失本の所蔵先が明らかになっていないものや、ギメ美術館附属図書館所蔵の絵入り本類のように、あることは分かっているでも目録が全くないものをこの先明らかにしたり、解題目録を作成したりする必要性を強く感じていました。このような目録を作成することにより、日本人研究者のみならず、外国人の日本研究者の研究が、さらに進むことが期待されます。

3日間で合計約150名の参加があり、大変盛況のうちに閉会しました。

なお、この研究集会の報告書は9月刊行予定です。



会場の様子

アジア開発銀行カンボジア行政官研修を実施

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、3月6日(日)から11日(金)の間、カンボジア行政官研修を実施しました。これは、平成21年よりアジア開発銀行(ADB)からの委託事業として実施しているもので、当初計画では、研修の受け入れ期間は2年間でしたが、ADB側からの要請で今回7回目を実施したものです。



集合写真

同研修は、同研究科の教員がカンボジアに出向き行政官に経済学の講義をし、後日日本での実地研修に参加するという内容で行われました。

6日に来日した研修員は、まず、宿泊先のホテルにチェックインした後、研修責任者である新海尚子国際開発研究科准教授からあいさつを受けました。

翌7日、国際開発研究科棟において、木村宏恒同研究科教授らより講義、8日は、長田博同研究科教授の引率でトヨタの工場を見学、9、10日は藤川清史同教授の引率で大阪証券取引所の見学、関西社会経済研究所で金融財政政策の講義を受講しました。

11日は、カンボジアで人材育成を効率化し失業率を低下させるには何が必要か、カンボジアの資本市場を活性化するには何が必要か等について議論しました。その後、昼食会と修了証授与式が行われ、桑森啓アジア開発銀行東京代表部代表、高田誠喜在名古屋カンボジア王国名誉総領事から祝辞、成田国際開発研究科長から閉会のあいさつがありました。

国際シンポジウム「グローバル化時代における現代東アジアの社会環境」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、2月21日(月)、22日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、国際社会科学団体連盟の協力のもと、国際シンポジウム「グローバル化時代における現代東アジアの社会環境」を開催しました。

1日目は、セッション「東アジアにおける多文化状況の諸相」が行われ、北海道大、椋山女学園大、本学等の若手



会場の様子

研究者を中心とした8名が、日本の多文化状況と比較し、中国、韓国、台湾、フィリピン、ミャンマーの状況について、また、米国、スウェーデン、南米、カナダの多文化の状況について論じました。

2日目は3部構成で行われ、第1部では、ネスター・カストロ フィリピン大学教授がフィリピンの民族問題について、曾熾芬台湾大学教授が東アジアの移民の状況について論じました。第2部のシンポジウム「東アジア新時代」では、樽本英樹北海道大学准教授と油井清光神戸大学教授が、東アジアの市民権や文化について問題提起し、活発な議論を行いました。第3部のシンポジウム「東アジアの高齢化・農業・多文化状況」では、韓国の金益基東国大学教授が東アジアの高齢化について、中国の張玉林南京大学教授が農業の問題について、さらにモンゴル族のサイハンジュナ^{サイハンジュナ}氏が国際結婚について日本語で論じ、大いに盛り上がりました。

日本を含めたアジアの問題でもあるグローバル化という問題に、東アジアの社会学者、地理学者などが鋭く切り込んだ今回のシンポジウムは、こうした交流こそ環境対応への重要な歩みだと実感させるものとなりました。

外部評価委員会を開催

●大学院経済学研究科



委員会の様子

大学院経済学研究科は、3月11日(金)、同研究科附属国際経済政策研究センターの外部評価委員会を開催しました。評価委員のグエン・ティ・クイ ベトナム外国貿易大学前副学長、白戸光政日本経済新聞社名古屋支社次長、林 正実中部経済産業局企画課長等から意見が出され、後日に評価報告書をまとめることになりました。

16日(水)には、同研究科の外部評価(研究評価)委員会を開催しました。同研究科では研究面に関して当該分野の専門家から評価を受ける外部評価(研究評価)委員会と、主に研究以外の諸側面に関して多様な立場・観点から評価を受ける外部評価(社会的評価)委員会を隔年で行うこととしていますが、今年度は制度・歴史研究分野を対象とする外部評価(研究評価)委員会を開催しました。評価委員からの評価を受け、後日に報告書を提出してもらうことになりました。

外部評価委員会を開催

●エコトピア科学研究所



委員会の様子

エコトピア科学研究所は、3月11日(金)、グリーンサロン東山ミーティングルームにおいて外部評価委員会を開催しました。平成18年に実施されて以来、2回目となる今回は、平成18年度から平成21年度までの研究活動等を対象に、国内外の12名の委員から評価を受けました。

委員会は、中村雅美江戸川大学教授を議長に、エコトピア指標、融合プロジェクト研究部門の研究成果等について意見交換を行いました。

議論を終えた後、中村教授から、「エコトピア科学」の定着に向けては、情報発信力を更に高めていく必要があること、「エコトピア指標」については、入門書を早期に刊行するよう要望があり、文理融合に向けて、学外の研究所等との連携も図っていくべきではないかとの講評を受けました。

最後に高井エコトピア科学研究所長からあいさつがありました。

高性能計算機システムφの運用開始式を挙

●素粒子宇宙起源研究機構



集合写真

素粒子宇宙起源研究機構は、3月2日(水)、情報基盤センターにおいて、高性能計算機システムφの運用開始式を挙りました。

計算機の愛称である「φ」は、ギリシャ語の愛知(φιλοσοφία)、物理(φυσικός)、小林・益川理論を象徴する複素位相φ、益川機構長のサインであるτ.φkawaにちなんで名付けられています。

開始式では、学内関係者、納入メーカーの担当者、報道各社列席のもと、山本理事、國枝理学研究科長、益川機構長、中村寿文 NEC 中部官庁・公共営業統括部長からあいさつがありました。その後、益川機構長により名称を刻印したプレートが計算機本体に上掲されました。

素粒子標準理論を超える理論の探索をメインターゲットとする計算機の構築は世界初とのことで、これにより機構の目指す標準理論を超える現代物理学の新たな地平の開拓に貢献することが期待されます。

大学教育改革フォーラム in 東海2011を開催

● 高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月12日(土)、IB 電子情報館及び中央図書館ラーニングコモンズにおいて、「大学教育改革フォーラム in 東海2011」を開催しました。同フォーラムは、大学改革の現場にいる教職員や学生が草の根レベルの交流を図る機会として開催されてから6年目になります。



会場の様子

今回は196名の参加があり、10セッションの中で、27件の報告と、29件のポスター発表があり、基調講演やパネルディスカッションを通し、大学生の学習のあり方とキャリア支援について取り上げられました。

基調講演では、筑波大学が科学リテラシー教育として実施している授業「現代人のための科学」について紹介されました。シンポジウムでは、キャリア教育において幅広い教養と基礎学力をいかに学生に身につけさせるか、そのために教職員自身がどのように意識変革をすればよいかについて議論が行われました。

各セッションでは、「地域のために大学ができること」、「大学職員の育成プログラムを考える」、「『市民性』を育む教育プログラム」、「図書館を通じたアカデミックスキルの育成」、「学生の視点から見えてくる大学－日本人学生、留学生は日本の大学をどう見ているか」、「大学職員研究の現在」、「文学教育のおもしろさとむずかしさ」、「大学教育の中の大学博物館」の各テーマについて活発な意見交換が行われました。

第21回博物館企画展「草原の民モンゴリアン」を開催

● 博物館

博物館は、2月8日(火)から3月5日(土)までの間、第21回博物館企画展「草原の民モンゴリアン－伝統と現代社会の狭間で－」を開催しました。

今回は、草原の民として知られているモンゴル人の伝統生活や文化について、特に、1990年代に社会主義から資本主義へと体制移行し、政治・経済・環境等様々な変革を見

せているモンゴルの近代化への過程について、モンゴル書道と写真を中心に紹介し、1,244名の来場者がありました。

展示室の一角にモンゴルの伝統住宅「ゲル」が作られ、多くの来場者がゲルの中に入ってモンゴル人の生活の一端を体験しました。

期間中には、モンゴルの伝統楽器である馬頭琴やホーミーによる民俗音楽や、伝統舞踊を紹介するコンサートが行われ、また、モンゴル書道家であるオドントヤ氏を招いてギャラリートークや書道教室も行われました。

さらに2月28日(月)には、城所卓雄駐モンゴル日本国特命全権大使が博物館を訪問し、企画展を熱心に見学しました。



会場の様子

博物館コンサートを開催

●博物館



2月18日のコンサートの様子

博物館は、2月18日(金)、博物館コンサート「モンゴル民俗音楽と伝統舞踊」を開催しました。まず、馬頭琴による演奏が行われ、次いで、馬頭琴の伴奏で伝統民俗舞踊が披露されました。モンゴルの衣装に身を包んだダンサーに来場者は熱心に見入っていました。引き続き、馬頭琴に似た弦楽器であるモンゴルの民俗楽器ホーミーにより、『5人のカザフ人』など4曲が演奏されました。

また、3月12日(土)には、目と耳で楽しむコンサート「フラメンコ」を開催しました。1時間半に渡り、フラメンコギター、カンテ(歌)、カホン(打楽器)、バイレ(踊り)などが披露され、239名の来場者が聞き入っていました。

演奏後には、博物館友の会が、前日に起きた東日本大震災のための募金を呼びかけ、善意の59,027円が寄せられました。翌日には全額中日新聞社会事業団に義援金として届けられました。

第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催

●博物館



鉱物採取をする参加者

博物館は、2月26日(土)、27日(日)の両日、第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催しました。これは、次世代教育の基幹事業として、名古屋市科学館との共催により、小・中学生とその保護者を対象に実施しているもので、今回は100名の応募者の中から、抽選で選ばれた34名が参加しました。

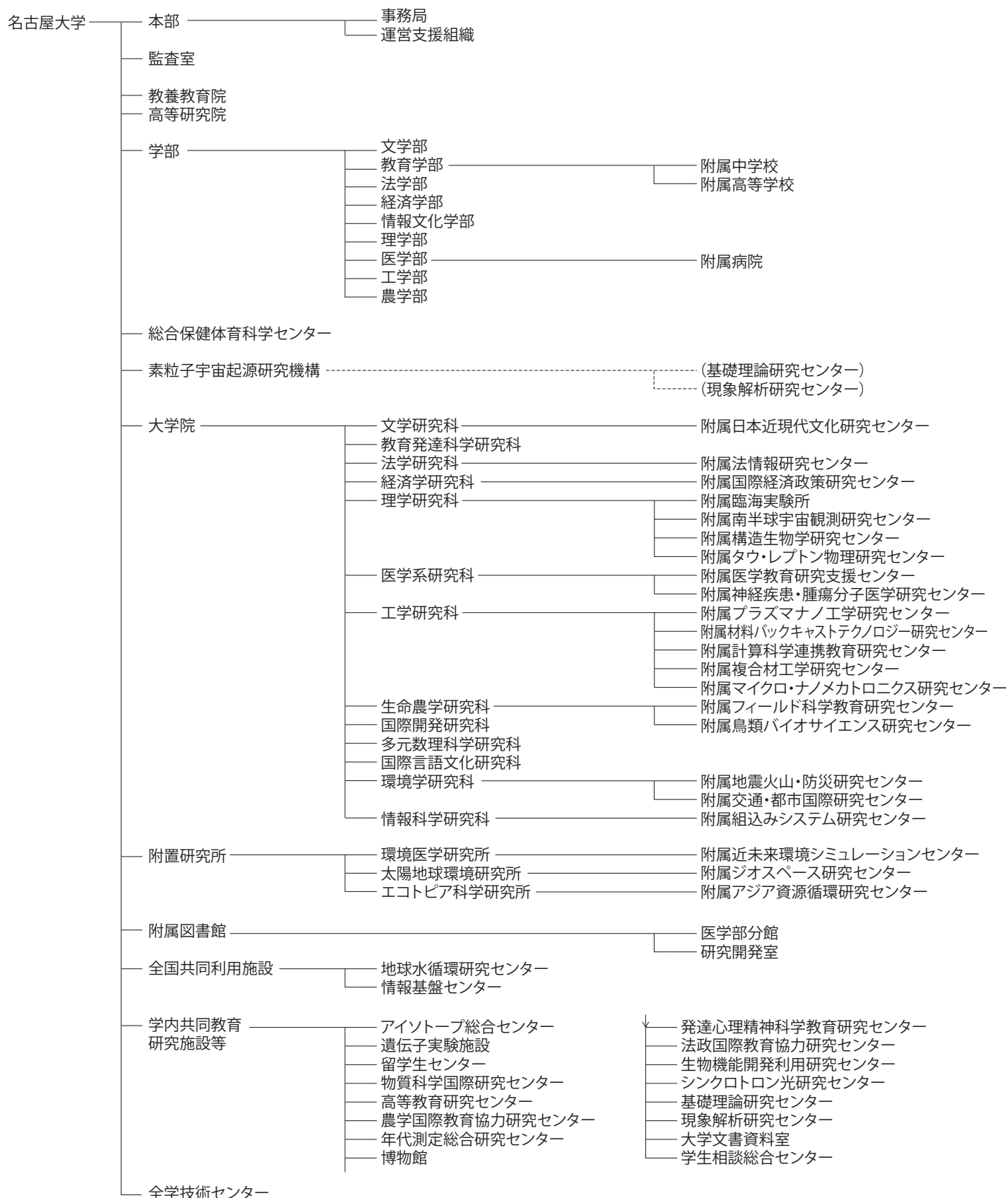
1日目は、博物館講義室において、事前学習として、実際の鉱物試料を使って、硬度や劈開などの性質について学びました。

2日目は、愛知県幡豆町の採石場を訪ね、前日の学習をもとに、鉱物を採集しました。参加者は室内での学習を発展させ、難なく目的の鉱物を手にすることができました。

その後、蒲郡市生命の海科学館へ移動し、採集した鉱物を使ったオブジェ作りを行いました。好天にも恵まれ、好評のうちに終了しました。

平成23年度名古屋大学組織図

平成23年 4月 1日



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H22. 2. 1	従四位瑞宝小綬章	名誉教授	丹羽 淳	
H22. 2.22	正四位	名誉教授	坂尾 弘	
H22. 9. 8	日本機械学会 部門一般表彰(新技術開発部門)	大学院工学研究科教授	金武 直幸	
H22. 9	ASME Best Mechatronics Paper Award	大学院情報科学研究科教授	大岡 昌博	連名受賞
H22.10. 8	第29回内藤コンファレンス優秀発表賞	大学院理学研究科助教	上田奈津実	
H22.10.10	日本パーソナリティ心理学会優秀大会発表賞	大学院環境学研究科教授	川口 潤	服部陽介(大学院環境学研究科 D2)と連名
H22.11. 4	AsBIC V Student Travel Award	物質科学国際研究センター COE 研究員	川上 了史	
H22.11.10	2010 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science Best Paper Award (MHS2010)	大学院工学研究科研究員	カルロス テルセロ	福田敏男(大学院工学研究科教授)、 新井史人(大学院工学研究科教授)、 中島正博(大学院工学研究科助教)他 3名と連名
H22.12. 4	応用地域学会 坂下賞	大学院経済学研究科教授	小川 光	
H22.12. 4	第15回日本神経精神医学会 ベストポスター賞	医学部附属病院医員	木村 大樹	入谷修司(大学院医学系研究科准教授)と連名
H22.12. 7	第27回井上研究奨励賞	物質科学国際研究センター 助教	瀬川 泰知	
H22.12. 7	第27回井上研究奨励賞	物質科学国際研究センター 助教	斉藤 尚平	
H22.12. 8	日本分子生物学会三菱化学奨励賞	大学院生命農学研究科 准教授	松林 嘉克	
H22.12.17	文部科学省科学技術政策研究所「科学技術への 顕著な貢献 2010 ナイスステップな研究者」	大学院工学研究科教授	高井 治	
H22.12.18	日本表面科学会中部支部第10回学術講演会 講演奨励賞	エコトピア科学研究所教授	楠 美智子	乗松 航(エコトピア科学研究所助教)、 吉川奈保子(大学院工学研究科 M1)、 東松直哉(大学院工学研究科 M1)と連名
H22.12.22	SII2010 Best Paper Award Finalist	大学院情報科学研究科 准教授	川合 伸幸	連名受賞
H23. 1. 8	応用物理学会東海支部 貢献賞	大学院工学研究科教授	高井 吉明	
H23. 1.12	第49回セラミックス基礎科学討論会・ 国際セッション ワールド・ヤングフェロー・ミーティング 2011 プレゼンテーション賞	エコトピア科学研究所 研究員	劉 振剛	
H23. 1.13	The 2011 Rossi Prize of the High Energy Astrophysics Division of the American Astronomical Society	太陽地球環境研究所教授	田島 宏康	
H23. 1.18	Society of Critical Care Medicine 2011 Annual Citation Award	大学院医学系研究科教授	松田 直之	
H23. 2. 4	井上科学振興財団 井上学術賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H23. 2.23	手島精一記念研究賞	大学院理学研究科助教	鈴木 孝幸	他7名と連名
H23. 2.23	平成22年度中小企業研究奨励賞	大学院経済学研究科准教授	山田 基成	
H23. 2.23	第52回本多記念賞	エコトピア科学研究所 特任教授	坂 公恭	
H23. 3. 8	宇宙科学奨励賞	大学院理学研究科 GCOE 研究員	石原 大助	
H23. 3.14	2010年度日本機械学会東海支部賞貢献賞	大学院国際言語文化研究科 准教授	エドワード ヘイグ	
H23. 3.17	第5回内藤記念フェロウシップ	大学院理学研究科教授	岡本 祐幸	
H23. 3.22	米国物理学会フェロー表彰	大学院理学研究科教授	岡本 祐幸	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H22. 9.27	日本塑性加工学会 優秀論文講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	木村 仁巳	
H22.10.10	日本パーソナリティ心理学会優秀大会発表賞	大学院環境学研究科 D2	服部 陽介	川口 潤(大学院環境学研究科教授)と連名
H22.10.21	第48回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞	大学院医学系研究科 D4	早川 徳香	尾崎紀夫(大学院医学系研究科教授)と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H22.11. 2	植物化学調節学会第45回大会ポスター賞	大学院生命農学研究科 M1	森 彩華	松林嘉克 (大学院生命農学研究科准教授) 他 2名と連名
H22.11.14	第 2 回吉野作造研究賞最優秀賞	大学院文学研究科 D3	齋藤 由佳	
H22.11.19	日本流体力学会中部支部 優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	高木 大輔	佐宗章弘 (大学院工学研究科教授)、 長田孝二 (大学院工学研究科准教授)、 酒井康彦 (大学院工学研究科教授) 他 1名 と連名
H22.11.20	名古屋大学グローバル COE 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D1	松田 将	
H22.11.24	(社)環境情報科学センター 第24回環境研究発表会 優秀ポスター賞 (学術委員長賞)	大学院環境学研究科 M2	荒川 祐至	
H22.11.24	(社)環境情報科学センター 第24回環境研究発表会 最優秀ポスター賞 (理事長賞)	大学院環境学研究科 M2	前新 将	
H22.11.25	分子シミュレーション研究会 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 D2	藤本 和士	
H22.11.25	分子シミュレーション研究会 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	伊藤 太一	
H22.11.26	日本航空宇宙学会 最優秀学生賞	大学院工学研究科 M2	岡 功介	
H22.12. 1	日本航空宇宙学会 第48回飛行機シンポジウ ム 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	中村 陽一	
H22.12. 2	平成22年度日本燃焼学会論文賞	大学院工学研究科 D3	小井土賢二	長谷川達也 (エコトピア科学研究所教授) 他 4名と連名
H22.12. 3	2010年度日本建築学会大会 シェル・空間構造 部門優秀発表賞	大学院環境学研究科 D2	高塚 真央	
H22.12. 6	日本地震学会 2010年度秋季大会学生優秀発表 賞	大学院環境学研究科 D1	平井 敬	
H22.12. 8	In Joint 5th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 11th International Symposium on Advanced Intelligent Systems Best Presentation Paper Award	大学院工学研究科 D2	高橋 弘武	吉川大弘 (大学院工学研究科准教授)、 古橋 武 (大学院工学研究科教授) と連名
H22.12. 8	In Joint 5th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 11th International Symposium on Advanced Intelligent Systems Best Presentation Paper Award	大学院工学研究科 D3	モハメド ロクヌザマン	関山浩介 (大学院工学研究科准教授)、 福田敏男 (大学院工学研究科教授) と連名
H22.12. 9	高分子学会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M1	村山 恵司	
H22.12. 9	高分子学会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	阪本 慎吾	
H22.12.10	第 8 回情報学ワークショップ (WiNF2010) 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	神谷 優貴	大野誠寛 (大学院国際開発研究科助教)、 松原茂樹 (大学院情報科学研究科准教授) と連名
H22.12.17	応用物理学会 結晶工学分科会発表奨励賞	大学院工学研究科 D2	谷川 智之	
H22.12.18	日本表面科学会中部支部 講演奨励賞	大学院工学研究科 M1	東松 直哉	
H22.12.19	IEEE Computational Intelligence Society Japan Chapter Young Researcher Award	大学院工学研究科 M2	山本 雅文	古橋 武 (大学院工学研究科教授)、 吉川大弘 (大学院工学研究科准教授) と 連名
H22.12.19	進化計算学会 ベストポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	山本 雅文	
H22.12.19	PACIFICHEM 2010 Student Poster Competition Award	大学院理学研究科 D2	珠玖 良昭	
H23. 1.10	The 12th International Symposium on Eco-materials Processing and Design Excellence Award of Poster Presentation	大学院工学研究科 M1	青木 淑恵	
H23. 1.11	日本環境共生学会第13回研究発表大会 学生発表賞	大学院環境学研究科 D3	宮田 将門	
H23. 1.18	第 1 回イオン液体討論会 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 D1	藤本 卓也	
H23. 1.18	e-CASE&e-TECH Distinguished Paper Award	情報文化学部研究生	李 雪蓮	横井茂樹 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H23. 1.20	電子情報通信学会 CST ソリューション コンペティション2010最優秀賞	情報文化学部 4年	伊藤 良哉	杉浦秀幸 (大学院情報科学研究科 M1)、 高瀬友琳 (大学院情報科学研究科 M1)、 北 栄輔 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H23. 1.24	平成22年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	馬場 達也	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23. 1.24	平成22年度電気関係学会東海支部連合大会 電気学会優秀論文発表賞 B賞	大学院工学研究科 M2	鬼頭 豊明	
H23. 1.28	計測自動制御学会人工生命体システム部会 学生論文賞	大学院情報科学研究科 D1	落合 洋文	
H23. 1.28	Artificial Life and Robotics 2011 Young Author Award	大学院情報科学研究科 M2	東垣外 翔	
H23. 2. 1	第1回日本学術振興会育志賞	大学院文学研究科 D1	市川 彰	
H23. 2.28	愛知県若手研究者奨励事業 第5回わかしゃち奨励賞優秀賞	大学院環境学研究科 D2	高塚 真央	
H23. 3. 4	情報処理学会全国大会 学生奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	粕谷 貴志	
H23. 3. 5	第29回日本国際保健医療学会西日本地方会 一般演題部門 優秀演題賞	医学部 3年	神谷 高志	青山温子 (大学院医学系研究科教授)、 川口レオ (大学院医学系研究科助教)、 樋口倫代 (大学院医学系研究科助教)、 中川由貴 (大学院医学系研究科 M1) と 連名
H23. 3. 5	第29回日本国際保健医療学会西日本地方会 一般演題部門 優秀演題賞	医学部 3年	鈴木 章弘	青山温子 (大学院医学系研究科教授)、 川口レオ (大学院医学系研究科助教)、 樋口倫代 (大学院医学系研究科助教)、 江啓発 (大学院医学系研究科 D2) と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 開催中の博物館第17回企画展「草原の民モンゴリアン—伝統と現代社会の狭間で—」の内容が紹介される	2.16 (水)	中日 (朝刊)
2 小林 誠本学特別教授らノーベル賞受賞者との交流会「HOPE ダイアログ」開催：3月12日	2.16 (水)	読売
3 現代日本読百科 (387)：「驚いている最中」町田 健文学研究科教授	2.16 (水)	中日 (朝刊)
4 東洋製鋼株式会社が本学と産業技術総合研究所および浜松熱処理工業株式会社と共同でショットピーニング加工や熱処理した鉄鋼部品などを短時間かつ非破壊で品質検査できる装置を開発する	2.16 (水)	日刊工業
5 博物館コンサート「フラメンコ」開催：3月12日	2.16 (水) 3. 4 (金)	中日 (朝刊) 読売
6 博物館特別企画「恐竜たちがやってきた—化石から学ぶ過去の生物多様性— 第三弾：こんな化石がみつかるの？ 例外的に良好に保存された化石群特集」開催：1月11日～3月31日	2.16 (水)	朝日 (夕刊)
7 本学は株式会社帝国データバンク「愛知県の社長分析調査」で愛知県内企業社長輩出数6位の大学となる	2.16 (水) 2.17 (木)	毎日 (夕刊) 日経 (朝刊)
8 現代日本読百科 (388)：「圧倒的な景観」町田 健文学研究科教授	2.17 (木)	中日 (朝刊)
9 本学など10大学と6カ所の国立高度専門医療研究センターは政府の新成長戦略の1つ「医療イノベーション」推進に向けた研究基盤の共通化などで共同歩調をとることに大筋合意する	2.17 (木)	毎日 (朝刊)
10 本学吹奏楽団「春のあしおとコンサート」が16日に愛知県心身障害者コロニー中央病院で開催される	2.17 (木)	中日 (朝刊)
11 小野耕二法学研究科教授は第2期河村たかし名古屋市政のとるべき方向について語る	2.17 (木)	朝日 (夕刊)
12 レーザー：野依良治本学特別教授は「科学は主に個人戦、技術は団体戦、イノベーションは世界の総力戦。科学と技術をイノベーションにつなげるために社会総がかりでしくみをつくらないといけない」と語る	2.18 (金)	日刊工業
13 書籍：「成長するティップス先生 授業デザインのための秘訣集」戸田山和久情報科学研究科教授、近田政博高等教育研究センター准教授、中井俊樹同准教授、池田輝政元本学教授著	2.18 (金)	中日 (朝刊)
14 玉置真悟さん本学学生は地域政党「減税日本」の公認で名古屋市議員選に挑む	2.18 (金) 2.24 (木)	朝日 (朝刊) 読売
15 名大カフェ“Science, and Me” 第9回「カレーパンから考える！～さまざまな機能を持った未来材料～」開催：3月10日	2.18 (金) 3. 4 (金)	読売 中日 (朝刊)
16 佐々木美和医学部附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリストの仕事が紹介される	2.19 (土)	朝日 (朝刊)
17 木股文昭環境学研究科教授は新燃岳の噴火について「1年前から山体が膨らむなどの前兆があったのに速やかに観測体制が強化できなかった。もっと正確な噴火予知の情報を出せばはず」と語る	2.19 (土)	中日 (朝刊)
18 後 房雄法学研究科教授が議会内閣制の積極論者として紹介される	2.19 (土)	中日 (夕刊)
19 依田 憲環境学研究科准教授は動物に装置を付けて行動を記録する「バイオリギング」の手法を用いてカツオドリの子鳥の飛び方などを記録する	2.20 (日)	読売
20 大場裕一生命農学研究科助教は自らが本学構内で発見したホタルミズについて解説する	2.20 (日)	中日 (朝刊)
21 現代日本読百科 (389)：この事業は「非効率だ」町田 健文学研究科教授	2.21 (月)	中日 (朝刊)
22 中日文化センター新講座：「地球環境の変化と保全」第1回「南極に観る気候変動」西村浩一環境学研究科教授	2.21 (月)	中日 (夕刊)
23 家森信善経済学研究科教授は上場する「MAXIS S & P 東海上場投信」を語る座談会に出席する	2.22 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
24 住友電気工業株式会社が本学との共同研究で使用済み超硬合金から高効率でタングステンを回収するプラントを完成する	2.22 (火)	日刊工業
25 現代日本誤百科 (390) : 「好きなことをカミングアウト」 町田 健文学研究科教授	2.23 (水)	中日 (朝刊)
26 叙位叙勲 : 坂尾 弘本学名誉教授 正四位	2.23 (水)	読売
27 福和伸夫環境学研究科教授はニュージーランドで発生した地震についてマグニチュードの値に比して被害が甚大な理由を解説する	2.23 (水)	中日 (朝刊)
28 地震の発生したニュージーランドに滞在していた本学学生3人の無事が確認される	2.23 (水)	読売 朝日 (朝刊)
29 益川敏英本学特別教授は3月8日放映予定の名古屋市科学館新館のオープンを記念したテレビ愛知特別番組「みんなでガリレオ！」に出演する	2.23 (水)	中日 (夕刊)
30 福和伸夫環境学研究科教授はニュージーランドの地震で起きた語学学校ビルの倒壊について原因を推測する	2.23 (水)	朝日 (夕刊)
31 現代日本誤百科 (391) : 「怒りっぽい人柄」 町田 健文学研究科教授	2.24 (木)	中日 (朝刊)
32 本学は農学部の桜酵母と酒米から造った日本酒を4月より大学生協で販売する	2.24 (木)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
	2.26 (土)	読売
	3. 5 (土)	日経 (朝刊)
33 山岡耕春環境学研究科教授はニュージーランドで起きた地震が昨年9月より活発化していた南島東部の断層の延長上で起こった可能性が高いと推測する	2.25 (金)	中日 (朝刊)
34 鈴木康弘環境学研究科教授はニュージーランドで起きた地震について「地下の構造を調べる必要はあるが、今回のマグニチュードであんなに被害が出たのは驚き。短い断層も甘くみてはいけな」と話す	2.25 (金)	中日 (朝刊)
35 特別講演会「モンゴルから見た日本、日本から見たモンゴルよりよいパートナーシップ構築のために」開催 : 28日	2.26 (土)	朝日 (朝刊)
	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
36 福和伸夫環境学研究科教授はニュージーランドの地震で崩壊したCTVビルについて「帯筋が少ない柱は粘りが弱く、粉々になりやすい」と指摘する	2.27 (日)	朝日 (朝刊)
37 朝日カルチャーセンター新講座 : 「文学に残る名僧～史実とフィクションの狭間にある真実！」阿部泰郎文学研究科教授「人間とは『世界・内・存在』だ～対訳で読むハイデカー『存在と時間』」「正義論の系譜～アリストテレス、カント、ロールズ」宮原 勇文学研究科教授	2.27 (日)	朝日 (朝刊)
38 京都大学で入試問題の一部が試験中にインターネット上に投稿された事件について、田上 隆学務部入試課長は「報道 (の情報) だけでは受験生が投稿したのかわからない」と話す	2.28 (月)	朝日 (朝刊)
39 京都大学で入試問題の一部が試験中にインターネット上に投稿された事件について、本学は今後実施予定の医学部の試験は面接試験のため特に対策をたてない方針とする	2.28 (月)	読売
40 現代日本誤百科 (392) : 「対策を行う」 町田 健文学研究科教授	2.28 (月)	中日 (朝刊)
41 第33回読売犬山ハーフマラソン : 登録大学女子ハーフ 垣津奈美さん本学学生が優勝	2.28 (月)	読売
42 本学は京都大学などの入試問題インターネット投稿事件を受けて学内委員会を設置する	3. 1 (火)	中日 (朝刊)
43 東京工業品取引所など3つの国内商品取引所が4月より本学などの国内6大学で寄附講座を共同開設する	3. 1 (火)	日刊工業
44 現代日本誤百科 (393) : 「気になる馬はいらっしゃいますか」 町田 健文学研究科教授	3. 1 (火)	中日 (朝刊)
45 医学部附属病院に対し総務省中部管区行政評価局が「駐車場の収容台数を増やすとともに、公共交通機関の利用を促す対応を充実させるべき」と改善をあっせんする	3. 2 (水)	朝日 (朝刊)
46 現代日本誤百科 (394) : 「磐石な結束」 町田 健文学研究科教授	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
47 家森信善経済学研究科教授が「MAXIS S&P 東海上場投信」の生みの親として紹介される	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
48 ミクロの探検隊「植物 : 自分で採集した花などを電子顕微鏡で見よう」開催 : 26日	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
49 「高校生が作るケータイハンドブック」を監修した今津孝次郎本学名誉教授は金城学院中学校で開かれた「『ケータイ』問題研修会」で保護者にアドバイスをする	3. 2 (水)	中日 (朝刊)
50 素粒子宇宙起源研究機構に高性能計算機システムが導入され、運用開始式が開かれる	3. 3 (木)	中日 (朝刊) 他2社
51 現代日本誤百科 (395) : 「キノコが地表に顔を出した」 町田 健文学研究科教授	3. 3 (木)	中日 (朝刊)
52 2月に開催された「地球温暖化対策に係る中長期ロードマップ推進地域フォーラム in 名古屋」での杉山範子環境学研究科特任准教授の講演内容が紹介される	3. 3 (木)	中日 (朝刊)
53 大屋雄裕法学研究科准教授は防犯カメラなど監視ツールの正しいあり方について論説する	3. 3 (木)	中日 (夕刊)
54 インド文化の会例会開催 : 22日 斎藤 滋本学非常勤講師が講師を務める	3. 3 (木)	中日 (夕刊)
55 医学部附属病院が食道がん治療に実力のある病院の1つとして挙げられる	3. 3 (木)	日経 (夕刊)
56 教育学部附属高等学校講演会「現代社会と科学」開催 : 3日 益川敏英本学特別教授が講演	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
57 本学や北海道大学、富山県立大学と共同で三菱電機株式会社がケーブルなど軟らかい物の取り付けもできる産業用機械を開発する	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
58 本学や産業技術総合研究所と共同で竹田印刷株式会社が室温で撥水加工できる技術を開発する	3. 4 (金)	日刊工業
59 留学生相談室は株式会社 keisei と協力し留学生がアルバイト先で「改善」に取り組むことで日本の組織を学ぶプログラム「日本組織なじみ塾」を実施する	3. 4 (金)	中日 (朝刊)
60 紙つぶて : 小学生の反抗 森 郁恵理学研究科教授	3. 4 (金)	中日 (夕刊)
61 2月27日に開催されたシンポジウム「求められる入院中子どもと家族の支援」での小島勢二医学系研究科教授の講演内容、若林俊彦医学部附属病院教授の発言内容が紹介される	3. 5 (土)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
62 名城大学が赤崎 勇本学特別教授らの研究の場となる「科学技術創生館」を開設する	3. 5 (土)	中日 (朝刊) 日刊工業
63 松尾清一医学部附属病院長は慢性腎臓病の予防を呼びかけるイベント「あなたの腎臓、大丈夫？」で「腎臓病は隠れた国民病だが、糖尿病や高血圧などを治療すれば予防することができる」と呼びかける	3. 6 (日)	中日 (朝刊)
64 山里敬也教養教育院教授らのグループは本学でLED信号機から走行中の車両に道路交通情報を即座に伝えるシステムの実験を行う	3. 7 (月)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
65 現代日本誤百科 (396)：「訴訟合戦」町田 健文学研究科教授	3. 7 (月)	中日 (朝刊)
66 潮木守一本学名誉教授は若者のバイタリティーを高めるために既卒・留年者の積極採用を提案をする	3. 7 (月)	日経 (朝刊)
67 坂 公恭エコトピア科学研究所特任教授が第52回本多記念賞を受賞	3. 7 (月)	中日 (夕刊)
68 現代日本誤百科 (397)：「事態が周知される」町田 健文学研究科教授	3. 8 (火)	中日 (朝刊)
69 福井康雄理学研究科教授らのグループ 宇宙で起きた「インフレーション」と呼ばれる急激な膨張期の痕跡を明らかにするためフランスの宇宙空間天体物理学研究所と共同研究を開始	3. 8 (火)	中日 (夕刊)
70 本学はキャンパスを撮影した写真集を作成し名古屋大学生協を通じて販売する	3. 8 (火)	朝日 (夕刊)
71 吉岡博文生命農学研究科准教授ら 植物免疫をコントロールする遺伝子発現の仕組みを解明	3. 9 (水)	中日 (朝刊) 他2社
72 「地域密着型金融シンポジウム」開催：8日 家森信善経済学研究科教授がパネル討論のコーディネーターを務める	3. 9 (水)	中日 (朝刊)
73 現代日本誤百科 (398)：「酒は適量が大切だ」町田 健文学研究科教授	3. 9 (水)	中日 (朝刊)
74 本学の前期日程入試の合格発表が行われる	3. 9 (水)	中日 (夕刊) 他2社
	3.10 (木)	読売
75 Viva 地球：森川高行環境学研究科教授は電気自動車などの次世代自動車と低炭素環境都市実現について語る	3.10 (木)	中日 (朝刊)
76 現代日本誤百科 (399)：「年賀状のことが頭をもたげてくる」町田 健文学研究科教授	3.10 (木)	中日 (朝刊)
77 春の講演会『「仕合せ」先進社会の哲学—北欧の国づくりにせまる』開催：12日 小池直人情報科学研究所准教授が講演	3.10 (木)	中日 (朝刊)
78 中日文化センター新講座：「昭和戦前期の激動政治」川田 稔環境学研究科教授「中国の歴史—近現代の場合」竹内 弘行本学名誉教授	3.10 (木)	中日 (朝刊)
79 医学部附属病院が子宮がん治療に実力のある病院の1つとして挙げられる	3.10 (木)	日経 (夕刊)
80 東山哲也理学研究科教授のグループ 世界で初めて植物の重複受精の瞬間を映像で捉えることに成功	3.11 (金)	中日 (朝刊) 他2社
81 日本泌尿器学会総会市民公開講座「若者に伝えたい科学の心」開催：4月23日 益川敏英本学特別教授が講演	3.11 (金)	読売
82 本学は2010年度技術士第2次試験合格者の出身大学ランキングで11位となる	3.11 (金)	日刊工業
83 家森信善経済学研究科教授は「名古屋証券取引所には、世界標準とは異なる上場基準が必要だ」と話す	3.11 (金)	読売
84 第12回理工系学生科学技術論文コンクール：下田裕平さん本学学生が特別賞を受賞	3.11 (金)	日刊工業
85 グライダー 全日本学生選手権大会第5日：本学は団体1位となる	3.11 (金)	朝日 (朝刊)
86 紙つぶて：百分の一 森 郁恵理学研究科教授	3.11 (金)	毎日 (夕刊)
87 山岡耕春環境学研究科教授は東北地方太平洋沖地震について「三陸沖から茨城県沖にかけて『連動破壊』が起きたのではないかと指摘する	3.12 (土)	読売
88 川崎浩司工学研究科准教授は「境界地震ではプレートの跳ね上がりが大きいくほど、上にある水の塊が大きく動き、津波が大きくなる」と指摘する	3.12 (土)	中日 (朝刊)
89 鈴木康弘環境学研究科教授は東北地方太平洋沖地震に伴う東海・東南海地震の誘発について否定的な考えを示す	3.12 (土)	朝日 (夕刊)
90 鈴木康弘環境学研究科教授は東北地方太平洋沖地震の余震活動が続いた日に長野県などで強い地震が相次いだことに関して「東北地方太平洋沖地震に誘発されて起きた可能性が高い」と話す	3.12 (土)	中日 (夕刊)
91 鷺谷 威環境学研究科教授は東北地方太平洋沖地震について「マグニチュード8クラスの余震発生は考えにくい」と話す	3.14 (月)	読売
92 鷺谷 威環境学研究科教授は東北地方太平洋沖地震に伴う東海・東南海地震の誘発について否定的な考えを示す	3.14 (月)	朝日 (朝刊)
93 山澤弘実工学研究科教授は福島第一原子力発電所の事故について「原発の炉心がそのまま冷却され格納容器も保たれれば、直接的な健康被害は出ないと思われる」と話す	3.14 (月)	中日 (朝刊)
94 田所敬一環境学研究科准教授は地震の連動の可能性の分析を呼びかける	3.14 (月)	日経 (朝刊) 日刊工業
95 水谷法美工学研究科教授と田所敬一環境学研究科准教授は東北地方太平洋沖地震より東海・東南海・南海地震の方が被害が大きくなる可能性があるかと警告する	3.14 (月)	中日 (朝刊)
96 本学などの学生が東北地方太平洋沖地震被災者支援の募金活動を始める	3.14 (月)	毎日 (朝刊)
97 玉置真悟さん本学学生は名古屋会議員に当選する	3.14 (月)	読売
98 現代日本誤百科 (400)：「駅を時刻通りに通過」した 町田 健文学研究科教授	3.14 (月)	中日 (朝刊)
99 現代日本誤百科 (401)：少し「濃いめ」に化粧 町田 健文学研究科教授	3.14 (月)	中日 (夕刊)
100 井口哲夫工学研究科教授は放射線を浴びる危険性がある場合の対処について解説する	3.14 (月)	中日 (夕刊)
101 福和伸夫環境学研究科教授は地震に備えて高台への移転を推奨する	3.14 (月)	中日 (夕刊)
102 本学は被災者から申し出があった場合、入学金や授業料の減免を検討することを決定	3.14 (月) 3.15 (火)	中日 (夕刊) 読売
103 田所敬一環境学研究科准教授は東北地方太平洋沖地震による東海地震や東南海地震への影響を分析する	3.15 (火)	日経 (朝刊)

名古屋大学写真集『Nagoya University Impressions』及び 豊田講堂レーザークリスタルの置物を制作

名古屋大学は、写真集『Nagoya University Impressions』及び豊田講堂レーザークリスタルの置物を制作しました。

写真集は、名古屋大学広報室で企画及びデザインをしており、四季折々のキャンパス風景、学生生活の様子など、プロのカメラマンによる写真を収めています。



名古屋大学写真集の表紙

置物は、本学のシンボルである豊田講堂を立体的に忠実に再現したもので、ずっしりと高級感あふれる作りになっています。

学生生活の思い出に、ご家族・友人へのプレゼントに、是非ご活用ください。

なお、写真集は、3月17日(木)より、名古屋大学生協の北部購買及び Books フロンテで、置物は、3月25日(金)より、北部購買で販売しています。

販売に関する問い合わせ先
名古屋大学生協北部購買 Tel 052-781-1111



豊田講堂レーザークリスタルの置物

農学部が桜酵母と酒米による日本酒を 製品化

農学部は、桜酵母と酒米による日本酒「名大さくら酵母」を作りました。

同学部は、平成 21 年度から、愛知県産業技術研究所食品工業技術センター及び盛田株式会社小鈴谷工場との共同研究を組み、まず、農学部の八重桜から分離した酵母をもとに清酒酵母「名大さくら酵母」を開発し、試験醸造を行いました。

平成 22 年度からは、農学部の学生の協力を得ながら、大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールドにおいて酒米「若水」を栽培し、昨年 12 月から盛田株式会社小鈴谷工場清酒部において「名大桜酵母」と「名大農場米」による醸造を行い、純米酒として製品化しました。

なお、本品は、4 月より、名古屋大学生協の北部購買で販売しています。

販売に関する問い合わせ先
名古屋大学生協北部購買 Tel 052-781-1111



名大さくら酵母

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**4月12日(火)～5月9日(月)、
5月13日(金)～6月9日(木)**
場 所：中央図書館4階展示室
時 間：9:30～17:00
参 加 費：無料

**附属図書館2011年春季展
「後藤文庫古筆切の展示」**

[問い合わせ先]
附属図書館
事務部情報管理課庶務掛 052-789-3667

4月16日(土)、5月25日(水)
場 所：博物館野外観察園
時 間：13:00～15:00
参 加 費：無料

博物館春の野外観察園見学会

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



4月20日(水)
場 所：岡崎信用金庫本部・本店ビル8階
時 間：15:00～17:00
参 加 費：無料

**環境学研究科しんきん環境事業イノベーション寄附講座
第12回企業経営者向けゼミナール**

講演題目：「燃料及び化学合成原料のバイオ化における課題
—原材料を如何に確保するか—」
講 演 者：松村正利氏（筑波大学名誉教授）

[問い合わせ先]
環境学研究科
しんきん環境事業イノベーション寄附講座
052-747-6550



4月26日(火)～8月31日(水)
場 所：博物館2階展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

博物館第15回特別展「深海の生物・化石展」

関連講演会
5月5日(木)
場 所：博物館3階講義室
時 間：14:00～15:30
講演題目：「知られざる深海の世界」
講 演 者：大路樹生（博物館教授）
6月4日(土)
場 所：博物館3階講義室
時 間：13:30～15:00
講演題目：「なんとも多様なフジツボの世界」
講 演 者：倉谷うらら氏（サイエンスライター）

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



4月27日(水)、5月18日(水)
場 所：環境総合館1階レクチャーホール
時 間：18:00～19:30 (4/27)
18:15～19:45 (5/18)
参 加 費：無料

第68回、第69回防災アカデミー

テ ー マ：「揺れをはかる—安全・安心な都市空間を見守る
振動モニタリング技術—」(4/27)
講 演 者：飛田 潤（環境学研究科准教授）
テ ー マ：「地震リスクに知で備える
—防災科研における地震災害軽減に向けた取り組み—」(5/18)
講 演 者：藤原広行氏（防災科学技術研究所総括主任研究員）

[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月11日(水)、6月22日(水)、7月13日(水)

場 所：野依記念学術交流館 2階講演室

時 間：16:30~18:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

GCOE 事務局

gcoe-office@chem.nagoya-u.ac.jp

グローバル COE プログラム

「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」

化学系セミナー

テ ー マ：「固体プロトニクスの確立と次元クロスオーバー領域への展開」(5/11)

講 演 者：北川 宏氏 (京都大学教授)

テ ー マ：「不斉酸素酸化の実現を目指して」(6/22)

講 演 者：香月 昴氏 (九州大学教授)

講演題目：「12族金属錯体の触媒反応と固体発光特性」(7/13)

講 演 者：伊藤 肇氏 (北海道大学教授)

5月14日(土)、5月21日(土)、5月28日(土)、

6月11日(土)、6月18日(土)

場 所：博物館 3階講義室

時 間：10:30~

定 員：75名

対 象：原則、シリーズ全てに

参加できる人

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館「達人(研究者)と話そうー自然を科学するー」

講演題目：「空、雲、光のサイエンスー雲の形と空の色ー」(5/14)

講 演 者：三矢保永氏 (本学名誉教授)

講演題目：「地下環境を科学するー岩盤中の物質の移動ー」(5/21)

講 演 者：吉田英一 (博物館館長)

講演題目：「匂いと香り、その不思議な世界」(5/28)

講 演 者：高部罔彦氏 (静岡大学名誉教授)

講演題目：「宇宙を科学するー宇宙観測の挑戦ー」(6/11)

講 演 者：若松健一氏 (岐阜大学名誉教授)

講演題目：「糖類を科学するー人類を支える多糖の世界ー」(6/18)

講 演 者：小林清一氏 (本学名誉教授)

5月16日(月)~5月17日(火)

場 所：野依記念物質科学研究館 2階

講演室

時 間：9:00~

[問い合わせ先]

工学研究科

教授 上垣外正己 052-789-5400

グローバル COE プログラム

「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」

シンポジウム

テ ー マ：「名古屋大学&ミシガン大学ジョイントシンポジウム」

6月18日(土)

場 所：博物館 2階展示室

時 間：14:00~

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館コンサート

テ ー マ：「マヌーシュスウィングとミュゼット」

演 奏 者：山本佳史氏 (ギター)、鈴木俊介氏 (ギター)、

榊間淳一氏 (ギター)、青木孝明氏 (アコーディオン)、

モロオカケイイチ氏 (ベース)



名大トピックス No.215 平成23年4月18日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

豊田講堂 2階ギャラリー
(平成23年3月9日)

※今年度の表紙写真は、普段あまり目にする事のない大学の建物の内部を紹介しています。



108 第6代総長 芦田 淳^{あしだ きよし} — 名大をひきいた人びと⑪ —

第6代総長の芦田 淳は、1914(大正3)年、現在の兵庫県芦屋市に生まれました。1938(昭和13)年に東京帝国大学農学部農芸化学科を卒業、大学院で研究を続け、アジア・太平洋戦争ただなかの44年に大阪帝国大学講師、敗戦後まもなく助教授となりました。そして53年、名古屋大学農学部農芸化学科栄養化学講座教授に就任しました。

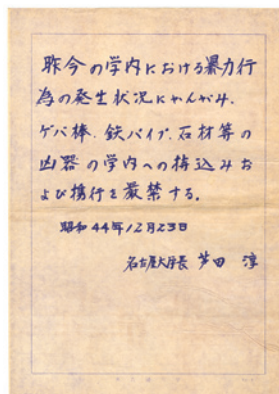
研究業績で特筆すべきは、世界に先駆けて栄養学に生化学的方法を導入したことです。1963年に日本栄養・食糧学会武田賞、64年には日本農学賞と読売農学賞を受賞しています。著書『栄養化学概論』(53年初版)は、不朽の名著として、現在でも栄養学を学ぶ者に読み継がれています。また、64年から68年まで農学部長を務めました。

そして、1969年5月に総長事務取扱に任命されます。これは、大学紛争で学内が騒然とするなか、篠原総長が任期をわずかに残して辞任したことによる措置でした。7月には、正式に総長に就任しました。この69年は、東山キャン

パスにも紛争が波及し、5月には本部と教養部が学生によって封鎖される事態となりました。芦田総長は、学生の退去を求めつつも、話し合いには応じる意向を示し、粘り強く事態の解決に努力しました。また大学自治を守るため、国会での大学運営に関する臨時措置法案の強行採決に抗議する声明を発表しています。

しかし紛争は収まらず、9月には学生が芦田総長を豊田講堂に「軟禁」し、事態の説明を強要しようとする事件が起きました。総長は不適切な方法を批判し、説明を拒否しますが、紛争はこの年の12月まで続きました。

そして芦田総長は、動揺した大学を立て直すため、紛争の終結前から大学改革に関する提案を積極的に発表し、総長直属の改革試案検討委員会を発足させました。また1972年には、「研究と教育に関する大学問題検討委員会」を設置し、その後の大学改革へとつながっていきました。



3	1	2
4	5	

- 1 芦田淳第六代総長(1914-2001)。退官後、椋山女学院大学学長を務めた。2001年、農学部創立50周年記念祝賀会を見とどけ、まもなく亡くなった。
- 2 名大農学部が置かれた安城キャンパス(1951-66年)。芦田教授も、1953年に赴任してから東山への移転までここに勤務していた。現在は、安城市総合運動公園になっており、その中に記念碑が建てられている。
- 3 封鎖される教養部(現在の全学教育棟)。最終的には1969年12月、封鎖に反対する教職員や学生による封鎖の実力解除、その後の警察の立ち入り捜査という形で事態は終結した。
- 4 封鎖学生に対し退去を求める芦田総長。
- 5 学内への「凶器」持ち込みを禁じる貼り紙(大学文書資料室所蔵)。